

さ る や ま い せ き
猿 山 遺 跡

平成 30 年 9 月

宇都宮市教育委員会

序

猿山遺跡は、新4号国道を挟んで、宇都宮市下栗町・瑞穂1丁目付近に広がる遺跡です。周囲は、さるやま城古墳群・東原古墳群、根本西台古墳群など、多数の古墳群が所在するほか、瑞穂野団地遺跡や下桑島西原遺跡などの集落跡、「古代の幹線道路」である推定東山道遺跡など、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が密集するエリアになります。

本遺跡内でも、これまでに奈良から平安時代にかけての竪穴住居跡が確認されており、同時代の集落跡が存在していることが判明していました。

今回物流倉庫の建設に伴い、影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきまして、事業者をはじめ、関係機関との協議の上、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、奈良・平安時代の住居跡が4軒確認され、一般集落の一部を記録保存することができました。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方々がさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました。地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成30年9月

宇都宮市教育委員会
教育長 水越 久夫

例 言

1. 本書は山晃物流倉庫株式会社（代表取締役 梅山良彦）による物流倉庫建設に伴う、宇都宮市西刑部町字西原 2681-2 に所在する猿山遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宇都宮市教育委員会文化課による確認調査に基づいて、事業予定地のうち 713.6 m²を対象とした。
3. 発掘調査及び整理作業は、山晃物流倉庫株式会社から委託を受けた(株)日本窯業史研究所が実施した。
4. 調査期間は平成 30 年 6 月 18 日から同年 7 月 13 日までである。
5. 本報告書の編集は宇都宮市教育委員会文化課の指導の下、三輪孝幸が担当し、菅間智子の協力を得て行った。執筆は第 1 章第 1 節調査に至る経緯を清地良太がその他を三輪が行った。
6. 調査組織は以下のとおりである。

調査指導・宇都宮市教育委員会

松本邦夫 文化課課長

君島直人 文化課文化財保護グループ係長

清地良太 文化課文化財保護グループ主任

調査実務・(株)日本窯業史研究所

菅間裕二 代表取締役

三輪孝幸 調査担当

7. 本調査にかかわる出土遺物及び記録類は宇都宮市教育委員会が保管している。
8. 調査及び報告書作成にあたり、次の方々からご指導、ご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する。(順不同・敬称略)

栃木県教育委員会文化財課 宇都宮市教育委員会文化課 山晃物流倉庫株式会社 株式会社柏崎測量設計事務所 株式会社塚田土建 正幸建設株式会社

9. 発掘調査、整理・報告書作成作業参加者は以下のとおりである。(敬称略)

入江春江 入江通子 川原稔由 塩沢寿男 住谷 昭 高橋麻佐美 西村順雄 山内愛子

凡 例

1. 使用した挿図は第 3 図が国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「宇都宮東部」「上三川」を部分複製した。
2. 調査区全体図は 1 : 200, 遺構 1 : 60, 遺物 1 : 3 を基本とする。遺物の番号は本文、観察表、写真図版等、統一している。
3. 遺構・遺物の挿図中の表示は以下のとおりである。

カマド構築材  焼土  土器 ●

4. 土層および遺物に関する色調は『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。

目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査経過	8
第3節 調査方法	8
第4節 基本土層	9
第2章 遺跡の位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	10
第3章 調査成果	14
第1節 遺跡の概要	14
第2節 遺構と遺物	14
1 竪穴住居跡	14
2 掘立柱建物跡	25
3 ピット	28
4 井戸跡	28
第4章 総括	31

挿図目次

第1図 トレンチ配置図	第10図 SI-03・掘方
第2図 基本土層図	第11図 SI-03 カマド
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡	第12図 SI-03 出土遺物
第4図 全体図	第13図 SI-04・カマド
第5図 SI-01・カマド	第14図 SI-04 出土遺物
第6図 SI-01 出土遺物	第15図 SB-01
第7図 SI-02・P2	第16図 SB-02・出土遺物
第8図 SI-02 カマド	第17図 SB-03・ピット
第9図 SI-02 出土遺物	第18図 SE-01・出土遺物

表目次

第1表 SI-01 出土遺物観察表	第5表 SB-02 出土遺物観察表
第2表 SI-02 出土遺物観察表	第6表 ピット計測表
第3表 SI-03 出土遺物観察表	第7表 SE-01 出土遺物観察表
第4表 SI-04 出土遺物観察表	

図版目次

図版 1 全景（西から）全景（北から）

図版 2 SI-01 完掘（南から）SI-01 掘方（南から）SI-01 カマド完掘（南から）SI-01 カマド掘方（南から）SI-01 遺物出土状況（南から）SI-01 土層断面（南から）SI-02 完掘（南から）SI-02 掘方（南から）

図版 3 SI-02 カマド完掘（南から）SI-02 カマド掘方（南から）SI-02P2 遺物出土状況（南から）SI-02 土層断面（南から）SI-03 完掘（南から）SI-03 掘方（南から）SI-03 カマド完掘（南から）SI-03 カマド掘方（南から）

図版 4 SI-03 カマド土層断面（南東から）SI-03 遺物出土状況（南西から）SI-03 土層断面（東から）SI-04 完掘（南から）SI-04 掘方（南から）SI-04 カマド完掘（南から）SI-04 カマド掘方（南から）SI-04 遺物出土状況（南から）

図版 5 SI-04 土層断面（南から）SB-01 完掘（南から）SB-02 完掘（北から）SB-03 完掘（南から）SE-01 完掘（南から）SE-01 土層断面（東から）基本土層（東から）作業風景

図版 6 SI-01 出土遺物 SI-02 出土遺物

図版 7 SI-02 出土遺物 SI-03 出土遺物

図版 8 SI-04 出土遺物 SB-02 出土遺物 SE-01 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

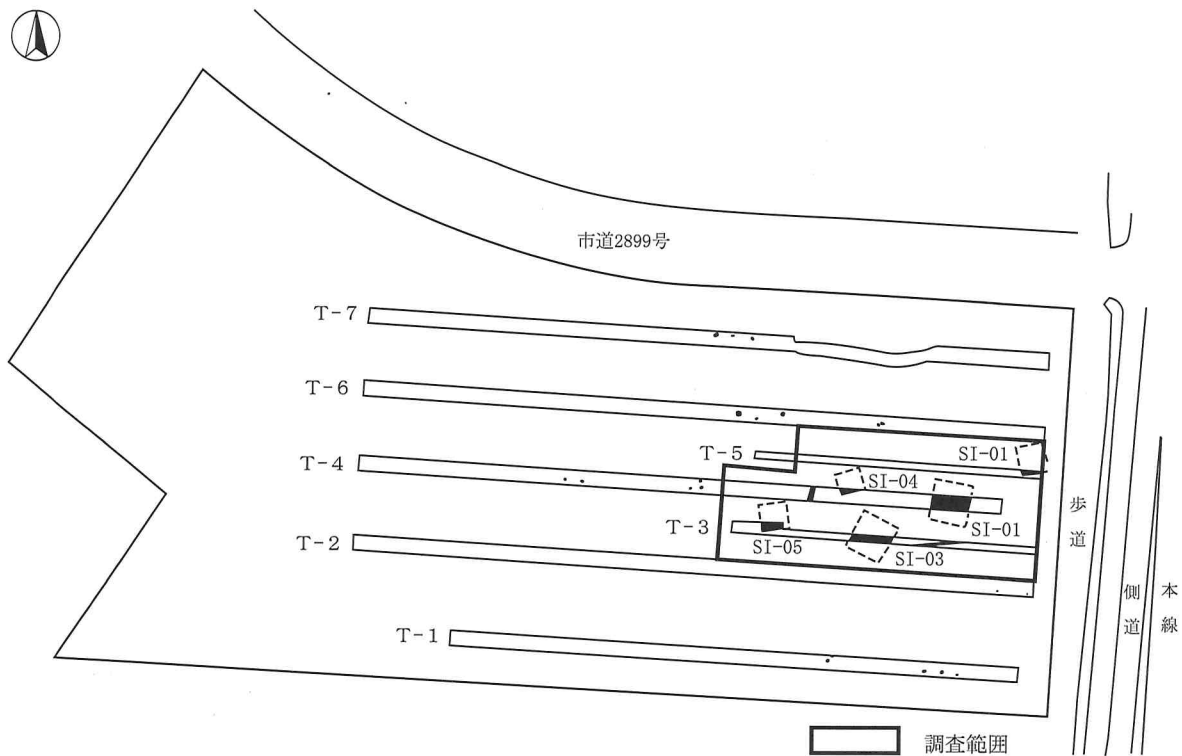
第1節 調査に至る経緯

平成30年2月28日付で、有限会社東新倉庫 取締役 秋澤佳代子より、西刑部町字西原2681番2，同2681番8，下栗町字南原611番5，同613番3，下桑島町字西原1201番14の猿山遺跡（県番号3319）内で、物流倉庫（倉庫業を営む倉庫）に伴い、文化財保護法93条の届出が提出された。同日付で市教育委員会文化課から県教育委員会文化財課（以下県文化財課）へ進達し、これに対し、県文化財課より確認調査の必要があるとの指示が3月12日付であったため、事業代理人の株式会社柏崎測量設計事務所 行政書士 柏崎慎悟と協議し、確認調査を実施することになった。

確認調査は、4月19日（木）から5月2日（水）に実施した。調査の方法は、開発区域内の建物と雨水浸透槽の掘削が及ぶ範囲に、幅1.2mから2.0mの試掘溝を7本設定し（T-1～T-7）、深さ40cm～85cmの表土部分を重機により掘り下げ、遺構の確認を行った。その結果、T-3からは竪穴住居跡2軒、溝1条、小穴1基とみられる遺構が確認された。また、T-4からは竪穴住居跡2軒、溝1条、小穴1基が確認され、T-5からは竪穴住居跡1軒が確認された（SI-05は本調査により後世の攪乱と判明）。

この調査結果を受けて、秋澤氏並びに代理人である株式会社柏崎測量設計事務所と対応を協議した結果、遺構が確認された倉庫東側部分の約757㎡分を本調査することとなった。

その後、調査の担当が㈱日本窯業史研究所と決まり、6月4日付で事業者である秋澤氏と宇都宮市教育委員会水越久夫との間で、調査に関する覚書を交わした。



第1図 トレンチ配置図

発掘調査は、市教育委員会が調査主体となり、調査実務は㈱日本窯業史研究所が行った。調査期間は、平成30年6月18日から7月13日の約20日間である。7月13日に野外調査はすべて終了した。

第2節 調査経過

本遺跡の調査は平成30年6月18日から同年7月13日まで行った。

6月18日機材の搬入と調査区の設定。調査前の現況写真撮影。重機により表土除去作業と人力による遺構確認作業。19日遺構確認作業。遺構確認状況の写真撮影。21日遺構検出状況図の作成、SI-01・02の掘削。22日SI-01掘削。25日SI-02・03掘削。26日SI-02・03・04、SB-01掘削。27日SI-01・02・03清掃、土層断面写真撮影・作図。SI-02・04掘削。遺構検出状況図補足。SI-01カマド土層断面図作成。29日SI-04、SD-01掘削。SK-01半截、土層断面図作成。SE-01半截。SI-02・04、SB-01土層断面図作成。7月2日SI-01セクションベルト除去、遺物出土状況写真撮影、平面図作成。SI-01カマド土層断面図作成。SI-02・04セクションベルト除去。SE-01土層断面写真撮影。SB-01掘削。3日SE-01掘削。SI-03セクションベルト除去。SI-02遺物出土状況写真撮影。SI-02・04カマド土層断面図作成。4日SI-01清掃・写真撮影。SI-02P2遺物出土状況写真撮影・作図。SI-02・03・04カマド土層断面写真撮影・作図。SI-04、SE-01清掃写真撮影。5日SI-02・03住居およびカマド清掃・写真撮影。SI-01・04掘方掘削。SI-02・03平面図作成。同カマド平面図作成、掘方掘削。9日全体清掃、全景写真撮影。SB-01写真撮影。SI-03掘方掘削。SD-01・SK-01平面図作成。テストピット掘削。10日SI-02・03掘方掘削。SI-02平面図作成。SI-04掘方平面図作成。SI-03カマド掘方土層断面図作成。基本土層写真撮影・作図。11日SI-03掘方掘削・清掃・写真撮影、および平面図作成。SI-01カマド掘方土層断面図作成。掘削・清掃・写真撮影および平面図作成。SI-02カマド掘方土層断面図作成、掘削。SB-01平面図作成。宇都宮市教育委員会文化課終了確認。12日SI-02・03掘方掘削・清掃・写真撮影、および平面図作成。SI-01掘方平面図作成。SB-03清掃・写真撮影。13日SB-01・03平面図作成。機材撤収。17日発見届・出土遺物保管書を宇都宮市教育委員会文化課および宇都宮南警察署に提出。整理作業は7月10日に遺物洗い、注記。18～20日図面修正。20～25日遺構図デジタルトレース。23～29日遺物実測および観察表作成。23日遺物写真撮影。30日～8月20日原稿執筆。図版作成。報告書の校正を行い、9月下旬入稿。10月中旬、報告書及び出土資料を宇都宮市教育委員会文化課に返却し、すべての作業を終了する。

第3節 調査方法

調査は市教育委員会文化課が指定した調査範囲に基づき、㈱柏崎測量設計事務所が計測したデータを現地で基準点からレイアウトナビゲーターにより調査範囲を設定した。

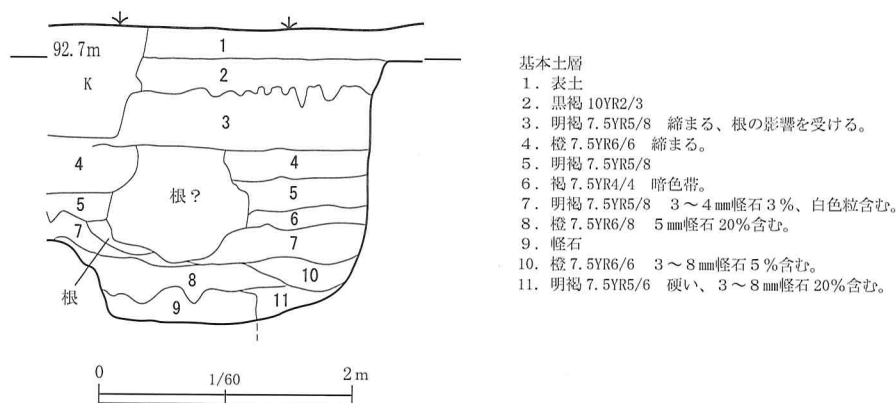
表土を重機で掘削し、人力により遺構確認作業を行った。遺構確認状況の写真は新4号国道の歩道橋上より撮影した。確認した堅穴住居跡はカマドを中心として東西南北にセクションベルトを設定し、掘削を行った。遺物は時期を特定できるものに関しては出土位置を記録、もしくは詳細図を作成して遺物取り上げ番号を付けて処理した。その他細片については、上記の4分割の区割りを時計回りに調査区番号を付け一括して取り上げを行った。

ピット・井戸跡・土坑は半截した。土層断面図はセクションベルトの東と南面を記録した。カマドはこの時点で南東側の4分の1を掘削し、遺存状況の確認を行った。セクションベルトの除去作業と同時にカマドの残りの部分の掘削を行い、カマドの土層断面の記録を行った。カマド及び住居の掘削後、精査を行い柱穴・周溝の確認・掘削を行った。遺構の完掘後、個々の写真撮影・平面図作成、調査区の全景写真撮影を行う。その後、竪穴住居跡は床面を掘削し、掘方の記録を行った。カマドも同時に掘方の記録を行った。井戸跡は確認面より深さ2.5 mのところまで掘削し、壁面に鹿沼層を確認したところで掘削を終了し、市教育委員会の確認の上、全掘は行わなかった。土坑は半截、溝跡はセクションベルトを設定し全掘を行った。図面及び写真の記録は残したが、覆土及び掘削痕の状況により近代以降の遺構と考えられることから本報告より除外した。全景写真撮影後、調査区西部に位置する大規模な不明遺構に関して、基本土層を確認することも踏まえて重機により鹿沼層まで掘削し、不明遺構の断面及び基本土層の断面の確認を行った。この結果、不明遺構に関しては大規模な攪乱と判断したことからその範囲を記録に留めるのみにした。

記録は確認状況図、遺構平面図をレイアウトナビゲーターにより計測し、方眼紙上に手書きで作図した。調査区はほぼ平坦であるため、等高線は作図できず、地点ごとの標高を記録した。土層断面図はレベルで水系レベルを設定、計測し作図した。カマドは住居跡の土層断面を基準として別図を作成した。図面の縮尺は確認状況図が1:100、遺構平面図、土層断面図が1:20、カマド及び遺物出土詳細図が1:10で作図した。写真は35 mm白黒・リバーサル、およびデジタルカメラで土層断面、完掘状況、遺物出土状況を記録した。

第4節 基本土層 (第2図)

調査区の現況は平地林であり、調査直前には樹木の抜根、整地が行われていた。調査区はほぼ平坦で、地表面から約40 cmでローム層に達する。ローム層上層まで植物の根の影響を受けローム層上面ではロームがブロック状に確認された。調査で確認された土坑、溝跡は耕作によるものと判断されるが、層位的には耕作面は認めることはできなかった。層位は黒色土層いわゆる黒ボク土の堆積は僅かで、明確なローム漸移層は確認できなかった。ローム層中の暗色帯までの深さは現地表面から1.4 m、鹿沼層までは同2.1 mを測る。



第2図 基本土層図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

猿山遺跡は栃木県宇都宮市西刑部地内に所在する。宇都宮市はJR宇都宮線宇都宮駅、東武宇都宮線東武宇都宮駅を中心に県都として発展してきた街で、近年においては市南部を北関東自動車道が通り大規模な商業施設等を中心とした新しい街並みが形成されている。遺跡は市の中心部の南東約6.5kmに位置し、調査区の東側には新4号国道が隣接している。

地形的には遺跡の位置する栃木県は関東平野の北部に位置し、三方を山地に囲まれ、中央部は洪積台地とそれを開析する河川が形成する沖積台地からなり中央部平地と呼ばれている。本遺跡は中央部平地に位置している。中央部平地は関東平野の北縁に位置し、山地から伸びる丘陵と河川が形成した低地とからなっている。これらは東から鬼怒川低地、岡本・磯岡台地、田原・願成寺台地、田川低地、神主台地、宇都宮・祇園原台地に分類される。遺跡の載る岡本・磯岡台地は鬼怒川と田川に挟まれ、宇都宮市北部白沢・岡本地区から下野市三王山周辺まで続く南北に長い台地である。この台地の東縁は鬼怒川低地に面し、宇都宮市内に水源をもつ江川などの小河川によってところどころ浸食されている。遺跡はこの江川の西側、岡本・磯岡台地の頂部に位置し、西約400mで田原・願成寺台地に接している。

第2節 歴史的環境（第3図）

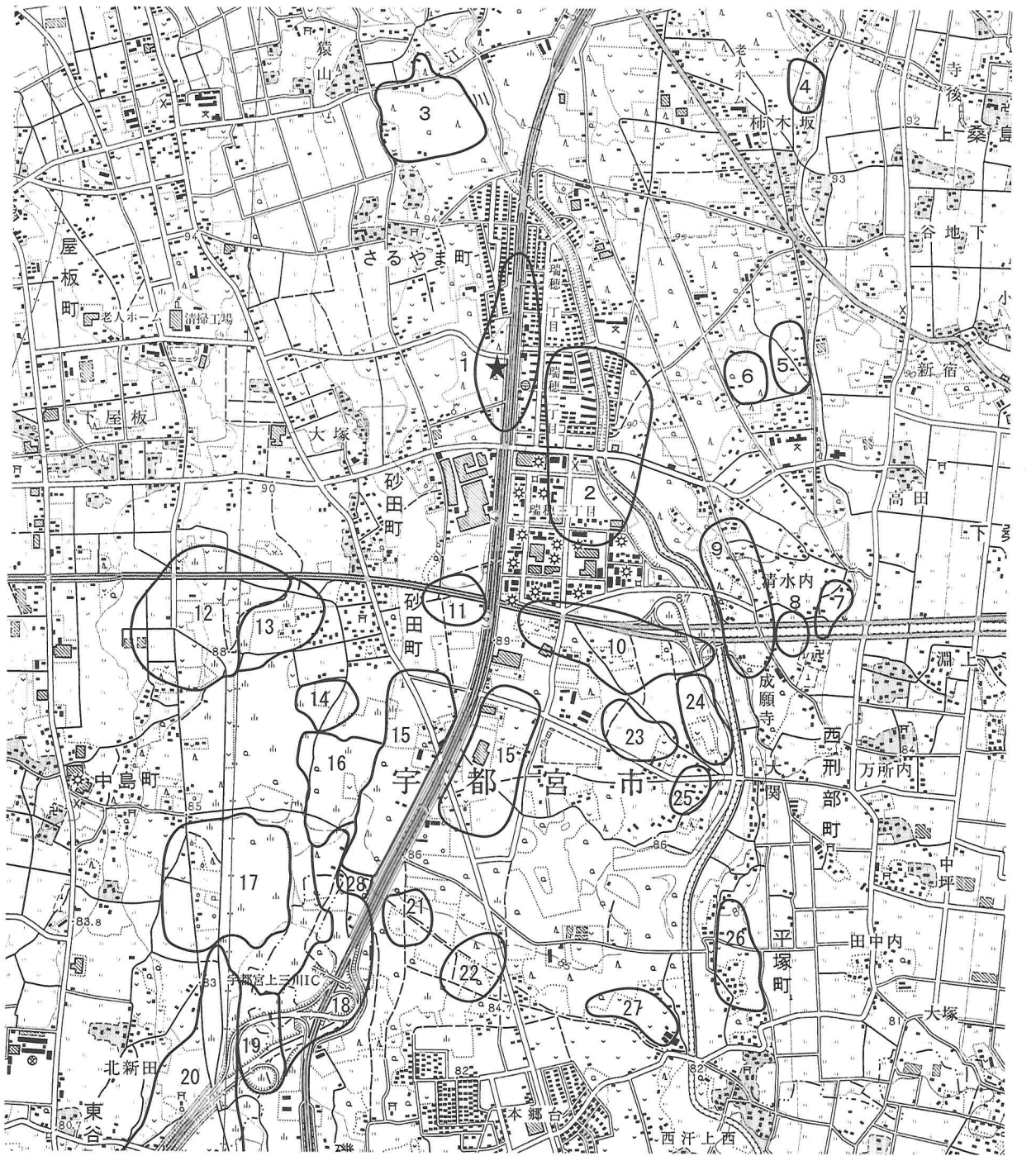
本遺跡の位置する宇都宮市南部は新4号国道、宇都宮環状線の開通によって周辺地域の開発が激しさを増す地域であり、これに伴って各地で遺跡の調査が頻繁に行われている。このことにより、本地域の歴史的景観が判明しつつあるが、本遺跡周辺に限ってみれば瑞穂野団地遺跡（2）、猿山遺跡（1）、猿山A遺跡の調査が行われているものの、体系的な精査が行われているわけではない。そこで、本稿では東谷・中島遺跡群の調査を参考に周辺の遺跡を概観してみたいと思う。

旧石器時代 瑞穂野団地遺跡から流紋岩製の縦長剥片が1片出土している。その他、西赤堀遺跡から尖頭器・スクレーパー・グレイバーを含む石器群のブロックが6カ所確認され、立野遺跡（17）では円形搔器・剥片、杉村遺跡（19）では水晶製尖頭器が確認されている。

縄文時代 早・前期の遺跡数は少ない。中期では調査はされていないものの柿の木坂遺跡（4）では阿玉台Ⅰ式の土器が採集されることから同時期の集落が想定されている。立野遺跡、磯岡遺跡などでは竪穴住居跡や土坑が確認されている。後期では明確な遺構が把握できたのは立野遺跡の土坑程度である。晩期では西下谷田遺跡で土坑が12基確認されたのみである。

弥生時代 前期については明確にし得ない。中期では磯岡遺跡、仏沼遺跡で土坑が確認され、磯岡北遺跡（18）では竪穴住居跡1軒、土坑2基が確認されている。後期では遺跡の数が増加し、瑞穂野団地遺跡では竪穴住居跡2軒が調査されている。

古墳時代 前期では田川西岸の神主台地及びその周辺が中心となる。具体的には茂原古墳群の茂原権現山古墳・茂原大日塚古墳・茂原愛宕塚古墳、神主古墳群の上神主浅間神社古墳があり、これらの古墳は田川流域の小地域圏の首長墓とされている。また、古墳ではないが牛塚東遺跡からは方形周溝墓が2基確認され、パレス壺が出土している。集落では

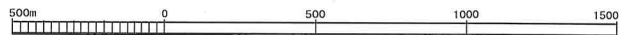


第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡範囲

★ 今次調査区

1 : 25,000

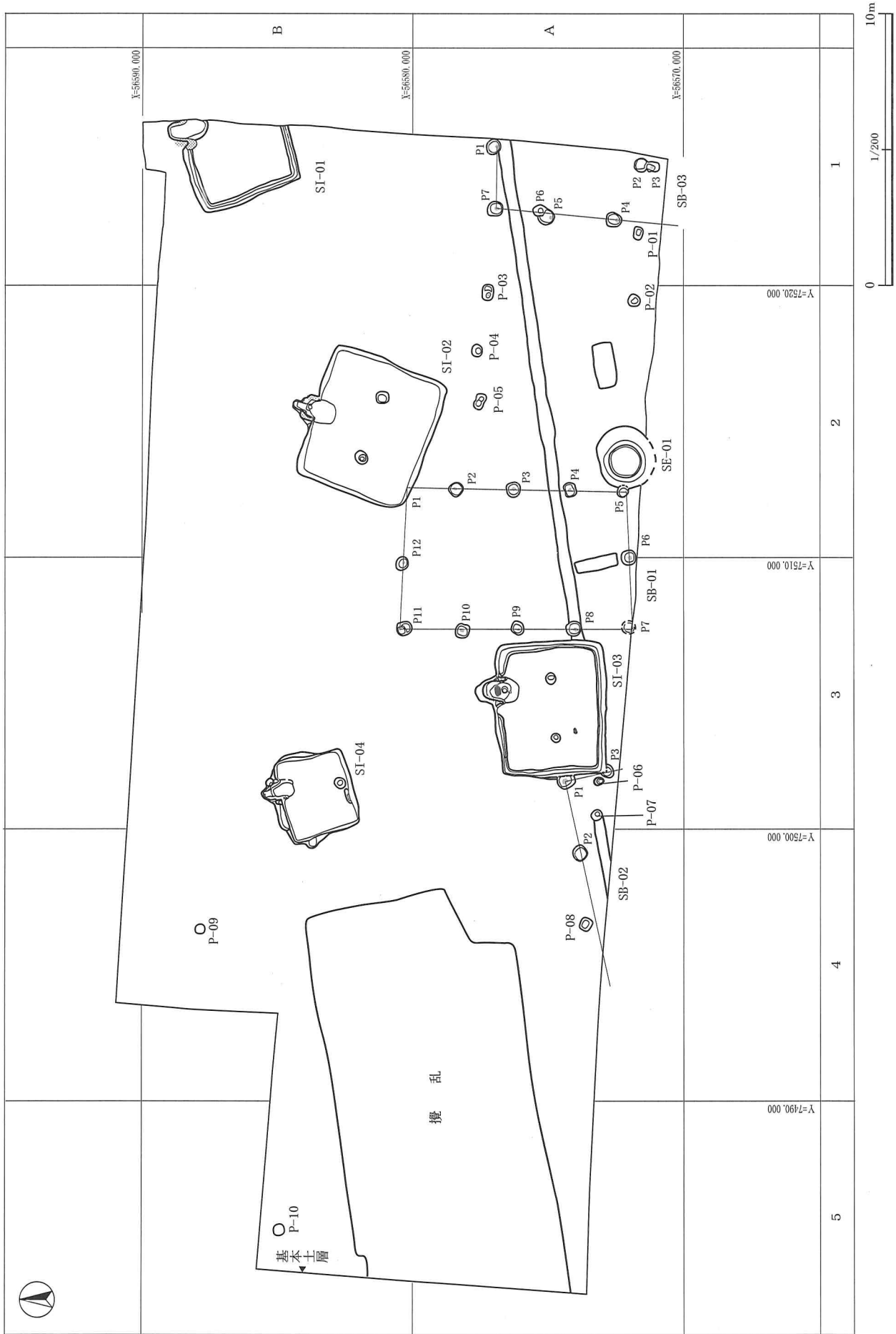


周辺の遺跡

1. 猿山遺跡
2. 瑞穂野団地遺跡
3. さるやま城遺跡
4. 柿木坂遺跡
5. 根本西台古墳群
6. 桑島台古墳群
7. 成願寺北遺跡
8. 成願寺遺跡
9. 藤腰遺跡
10. 大関台遺跡
11. 上横田A遺跡
12. 砂田遺跡
13. 砂田瀧遺跡
14. 砂田姥沼遺跡
15. 西刑部西原遺跡
16. 中島笹塚遺跡
17. 立野遺跡
18. 磯岡北遺跡
19. 杉村遺跡
20. 権現山遺跡
21. 西沼遺跡
22. 内野遺跡
23. 中道遺跡
24. 小屋原遺跡
25. 後尚塚遺跡
26. 平塚原根岸遺跡
27. 下小屋原遺跡
28. 琴平塚古墳群

杉村遺跡で数軒確認されているが、大規模な集落は形成されていない。また、西下谷田遺跡では竪穴住居跡が16軒確認されるなど、本時期の古墳と集落の中心は田川西岸の神主台地及びその西の祇園原台地東縁と考えられている。中期になると田川東岸地域や西岸のやや北部域に集落が形成されるようになる。古墳では塚山古墳群の塚山古墳・塚山西古墳、東谷古墳群の笹塚古墳・鶴舞塚古墳など大型前方後円墳が出現してくる。笹塚古墳推定全長100m、塚山古墳全長98mは県内最大規模であり、田川流域を超えた地域圏の首長墓と捉えられる。集落については田川東岸のより低位な台地への進出が顕著となり、笹塚古墳北東部、田原・願成寺台地を中心とした広範囲に集落が展開するようになる。岡本・磯岡台地では成願寺遺跡(8)から竪穴住居跡が22軒確認されている。後期になるとその分布も拡大傾向にあり、岡本・磯岡台地を超えて鬼怒川低地にもその分布が認められる。古墳では久部愛宕塚古墳群の久部愛宕塚古墳、琴平塚古墳群(28)の琴平塚古墳、西赤堀遺跡の円墳2基、西赤堀狐塚古墳などである。7世紀代では成願寺遺跡の方墳3基、円墳4基の他、終末期と考えられる下栗大塚古墳があげられる。集落では砂田遺跡(12)、立野遺跡、杉村遺跡、瑞穂野団地遺跡、成願寺遺跡などがある。西下谷田遺跡では八脚門を伴う掘立柱塀が確認され、評家と考えられている。

奈良・平安時代 本遺跡を含む周辺地域は古代律令制における下野国、河内郡にあたる。河内郡には丈部、刑部、大統、酒部、三川、財部、真壁、軽部、池辺、衣川の10の郷が存在したとされる。上神主・茂原官衙遺跡からは瓦葺礎石建物跡を中心とした大型掘立柱建物群が確認され、河内郡家正庁と正倉群と考えられている。東山道は近年の調査により明らかとなり、本遺跡周辺では杉村遺跡、磯岡北遺跡、磯岡遺跡で確認されている。集落では猿山遺跡、瑞穂野団地遺跡がある。また、小屋原遺跡(24)からは「財部」の墨書土器が出土している。



第4图 全体图

第3章 調査成果

第1節 遺跡の概要

調査区は新4号国道と市道2899号線の交差する南西側に隣接し、猿山遺跡の西部にあたる。試掘調査の結果、事業予定地の東端部にあたる713.68㎡に対して本調査を行った。ちなみに、事業予定地の西側ではピット以外遺構は確認されていない。確認した遺構は奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟及び調査区外に延びることが予想される建物跡2棟とピット7基、井戸跡1基である。なお、その他に土坑2基、溝跡1条を確認したが覆土及び掘削の痕跡等から考えて近代以降のものと推測されたことから本報告から除外した。出土遺物は土師器・須恵器の坏・甕である。

第2節 遺構と遺物

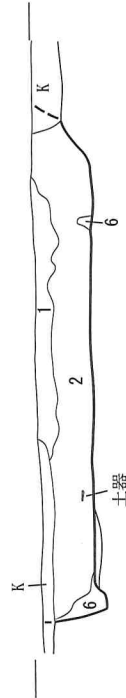
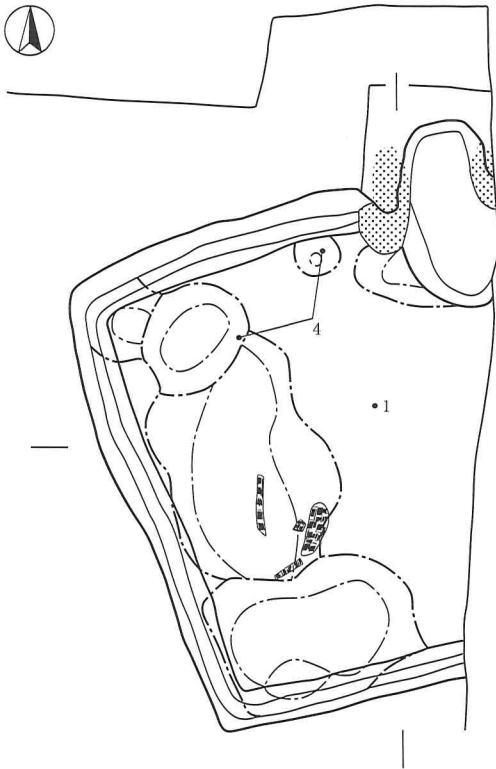
1 竪穴住居跡

SI-01（第5・6図，第1表，図版2・6）

本跡は調査区の北東隅B-1グリットに位置し、調査区外に延びている。南西6mにSI-02が位置する。平面形は方形と推定され、規模は南北4.0m，確認面からの深さ0.47mを測る。主軸方向はN-20°-Wを示す。壁は垂直に立ち上がる。壁溝は調査区内においてカマド以外で確認し、幅25～30cm，床面からの深さ5～8cmを測る。床面はローム層を掘り込み、中央が平らに硬く仕上げている。西壁際には掘方が認められ、ローム塊を充填した黒色土によって埋めて床が作られている。柱穴は認められなかった。カマドは北壁に設けられ、確認面を攪乱に切られており、煙道部は確認できなかった。袖は灰褐色粘土で作られる。火床は床面より若干窪んでいるが、焼土は認められなかった。覆土はローム粒・塊を含んだ黒褐色土1・2層によって埋め戻されている。床面直上には若干焼土を含んだ黒褐色土が認められた。中央西寄り、床面から約10cmに炭化材が纏まって出土したが状態は良くなく、他に炭化材の出土は認められなかった。遺物は床面中央よりつまみの取れた須恵器蓋（1）が逆位で出土した。須恵器坏（6）はカマド西側の覆土上層から出土し、その他は覆土中から僅かに出土したのみである。

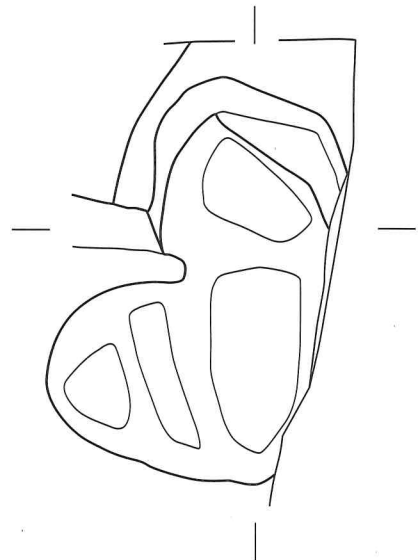
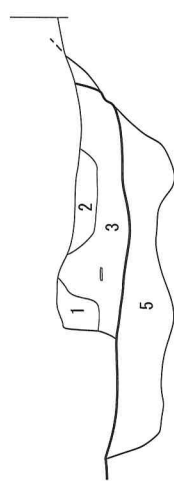
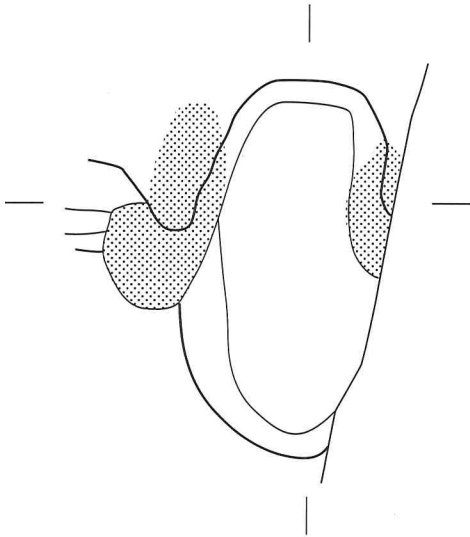
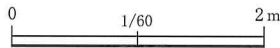
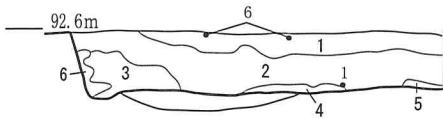
SI-02（第7～9図，第2表，図版2・3・6・7）

本跡は調査区の中央東寄りのA・B-2グリットに位置する。住居の南西隅がSB-01の北東隅にあたる柱掘方と重複するが、住居覆土の状況からでは新旧関係を捉えることが困難であった。平面形は方形を呈し、規模は南北4.5m，東西5.0m，確認面からの深さ0.7mを測る。主軸方向はN-24°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はローム層を掘り込み中央が硬く平らに仕上げている。掘方は隅を不整形に掘り込んでいるほかカマド前を深く掘り込み、東壁中央には長方形の掘り込みが認められた。いずれも褐色土で埋められている。また、床面中央は5～10cmの厚さに貼床が認められ、褐色土と黒色土が互層になって硬く締まっていた。柱穴は中央の東西に2基が確認された。柱痕跡は確認できなかった。規模はP1が径47cm，深さ33cm，P2が径50cm，深さ36cmを測る。P2（西側）の床面よりわずかに下がったところより土師器甕（6）が横位で検出された。土師器甕は体

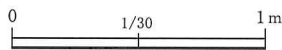
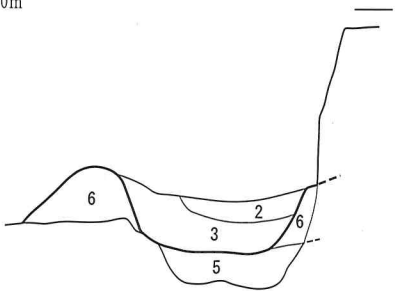


SI-01

1. 黒褐 10YR2/3 縮り普通、1mmローム粒 20%、5~8mm塊、焼土塊 3%含む。埋め戻し。
2. 黒褐 7.5YR2/2 縮り普通、1~3mmローム粒 30%、2~3mm焼土粒 5%含む。埋め戻し。
3. 黒褐 7.5YR2/2 縮り弱い、1~3mmローム粒 5%含む。
4. 黒褐 7.5YR2.5/2 縮まる、焼土混じる。
5. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒 5%、炭化物混じる。
6. 暗褐 7.5YR3/3 縮り弱い、1~2mmローム粒 40%、5~8mm塊 3%含む。崩落土。



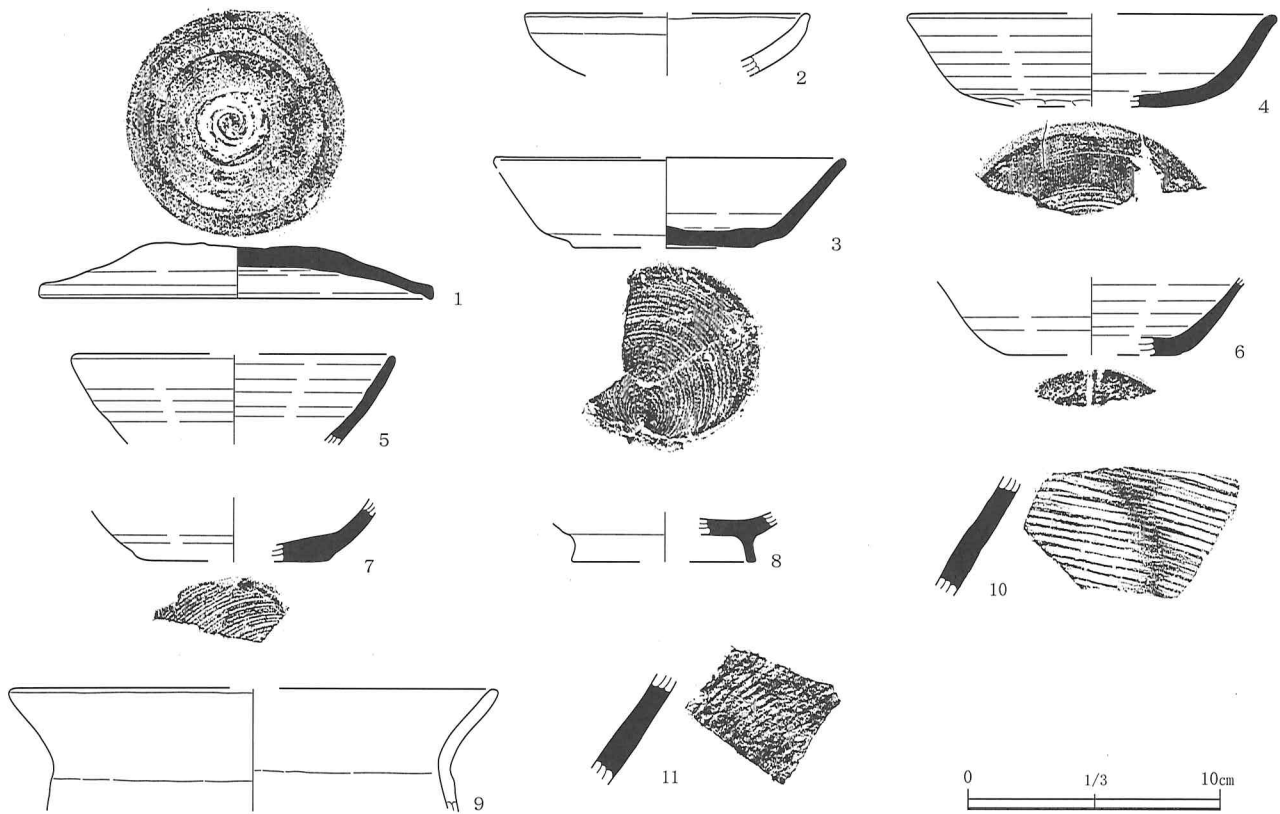
93.0m



SI-01 カマド

1. 黒褐 7.5YR3/2 2~3mmローム粒 20%、3~8mm焼土塊 5%含む。
2. 極暗褐 7.5YR2/3 2~3mmローム粒、焼土粒 5%含む。
3. 黒褐 7.5YR3/2 3~5mm焼土塊 20%、灰褐色粘土混じる。
4. 黒褐 10YR2/3 3~4mm焼土粒 5%、1~2mmローム粒混じる。
5. 暗褐 10YR3/4 縮り弱い、2~3mmローム粒 10%、3~10mm焼土塊含む。
6. 暗褐色粘土 10YR3/3 3~5mm焼土粒 5%含む。

第5図 SI-01・カマド

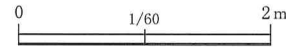
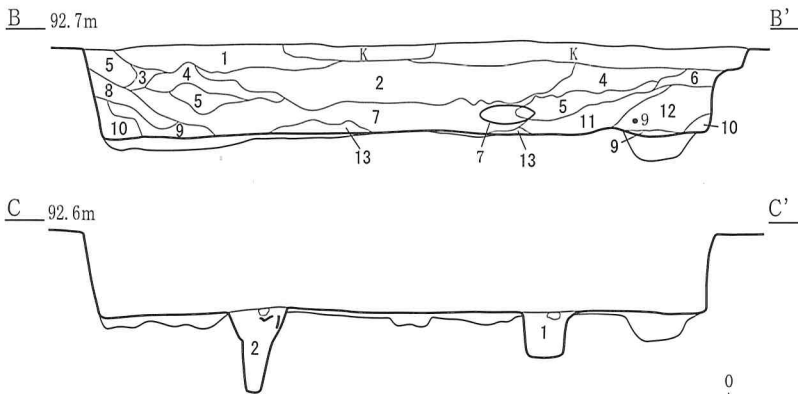
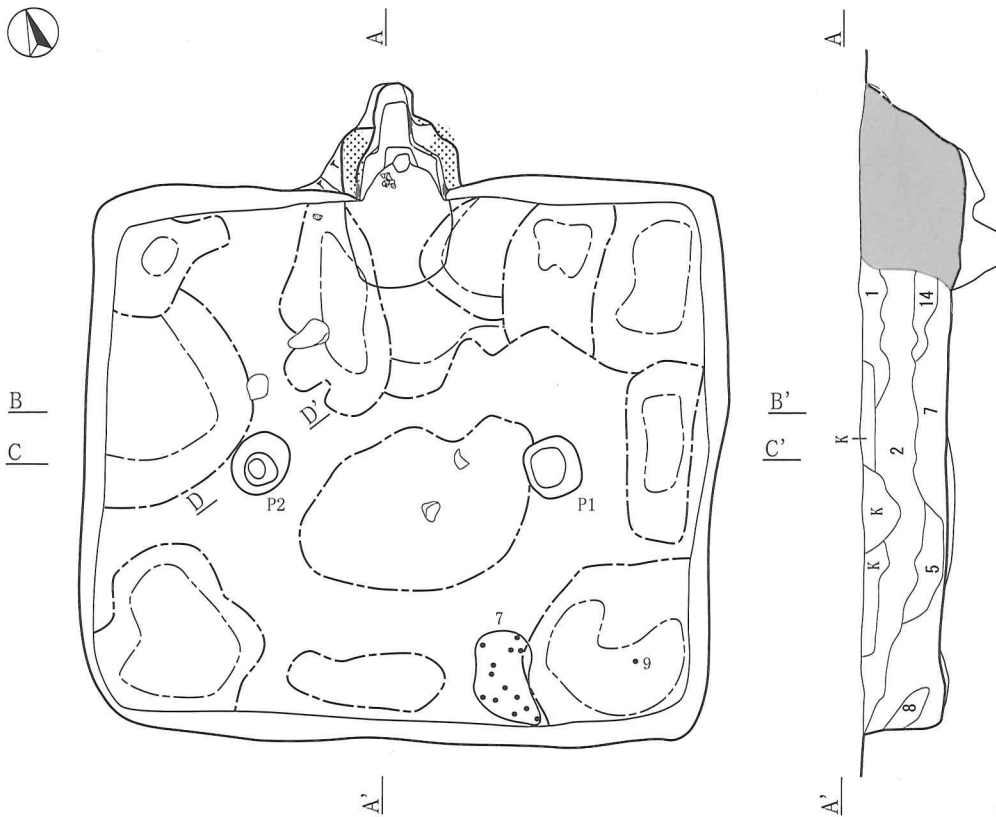


第6図 SI-01 出土遺物

第1表 SI-01 出土遺物観察表

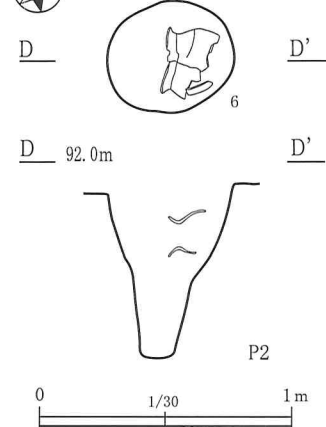
番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	15.6	—	—	石英砂、雲母	黄灰 2.5Y5/1	良好	ロクロナデ、上部が回転ヘラ削り、つまみ剥離。	SI-01 No.1	
2	土師器	杯	(11.2)	—	—	微砂粒	橙 7.5YR7/6	普通	口縁部ヨコナデ、体底部外面ヘラ削り。	SI-01 カ X	
3	須恵器	杯	(13.9)	3.6	7.2	白色粒	灰白 2.5Y7/1	普通	ロクロナデ、底部糸切り。	SI-01 4 X	
4	須恵器	杯	(14.5)	3.7	(9.2)	微砂粒	灰白 7.5Y8/1	やや不良	ロクロナデ、底部糸切り、外周手持ちヘラ削り。	SI-01 No.2・No.5	
5	須恵器	杯	(12.7)	—	—	微砂粒、3mm礫	灰 7.5Y4/1	良好	ロクロナデ。	SI-01 3 X	
6	須恵器	杯	—	—	(7.0)	微砂粒	灰 7.5Y5/1	良好	ロクロナデ、底部ヘラ削り。	SI-01 No.1	底部ヘラ記号
7	須恵器	杯	—	—	(7.6)	白色粒	灰白 2.5Y7/1	普通	ロクロナデ、底部糸切り。	SI-01 2 X	
8	須恵器	高台付杯	—	—	(7.3)	白色粒	灰白 10YR7/1	普通	ロクロ整形、付け高台。	SI-01 No.1	
9	土師器	甕	(19.1)	—	—	微砂粒	明赤褐 2.5YR5/6	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ削り。	SI-01 3 X	
10	須恵器	甕	—	—	—	雲母	オリープ黒 5Y3/1	普通	外面平行叩き、内面ヘラナデ。	SI-01 3 X	
11	須恵器	甕	—	—	—	白色粒、黒色粒	灰 N4/0	良好	外面平行叩き、内面ナデ。	SI-01 3 X	

部下半部を欠き、口縁部を西側に向け柱穴に廃棄されていた。体部下半部の破片はカマド覆土中の出土のものが接合した。カマドは北壁の中央に設けられている。壁を凸形状に掘り込んで作られている。袖は遺存していなかったが、掘方には構築材の灰黄褐色粘土が遺存し、燃焼部の両壁及び煙道部の東壁のローム面に焼土が認められた。火床は床面より若干下がると考えられるが、焼土は確認されなかった。燃焼部中央から須恵器杯（3・5）が逆位で、土師器甕（8）の破片が火床に刺さった状態で円礫と共に纏まって出土した。覆土は住居の隅に締りの強い黒褐色土・暗褐色土8～10層が堆積した後、ローム粒・ローム塊を含んだ暗褐色土4～7層によって6割程度が埋め戻され、黒褐色土1～2層が自然の状態に堆積している。遺物は前記したもの以外は南壁際中央の覆土下層から土師器甕

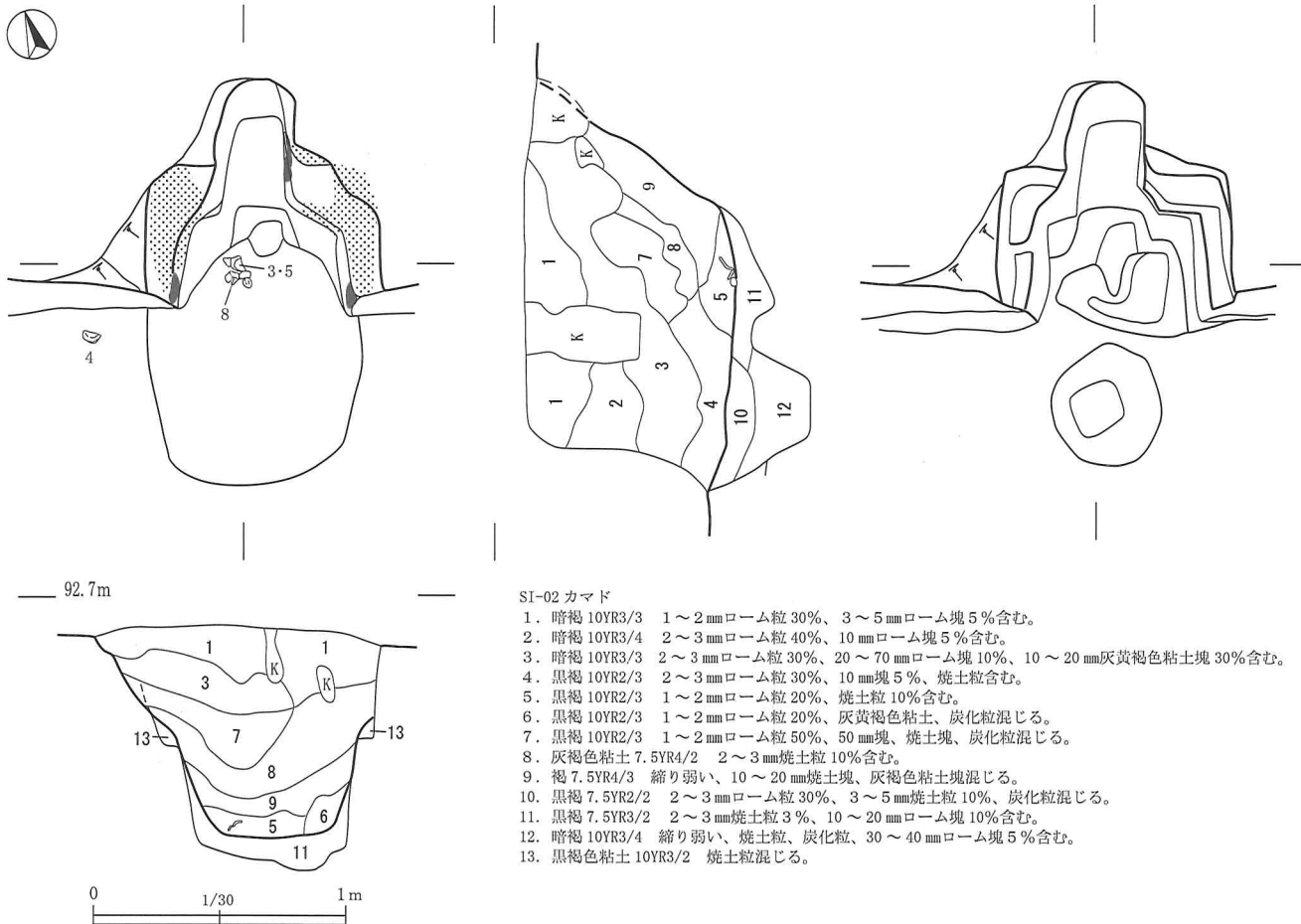


- SI-02
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒20%、5~8mm塊3%含む。
 2. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒40%、5~10mm塊10%含む。
 3. 黒褐 10YR2/3 縮り弱い、3~4mmローム粒5%含む。
 4. 暗褐 10YR3/3 1~2mmローム粒50%、5~10mm塊10%含む。
 5. 暗褐 10YR3/3 2~3mmローム粒30%、10~20mm塊5%、黒色土塊混じる。
 6. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒20%、10~30mm塊3%、ソフトローム混じる。
 7. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒40%、10~30mm塊10%、10mm黒色土塊5%含む。
 8. 黒褐 10YR2/2 2~3mmローム粒20%、5~8mmローム塊3%含む。
 9. 暗褐 10YR3/4 縮り強い、2~3mmローム粒20%、10~40mm塊10%含む。
 10. 黒褐 10YR2/2 縮り強い、2~3mmローム粒20%、10mm塊5%含む。
 11. 暗褐 10YR3/3 2~3mmローム粒30%、10~40mm塊20%含む。
 12. 暗褐 10YR3/4 1~3mmローム粒50%、30~80mm塊20%含む。
 13. 暗褐 10YR3/3 縮り強い、灰色粘土30%含む。

- SI-02 P1・2
1. 褐 7.5YR4/4 縮り弱い、3~4mmローム粒、40mmローム塊含む。
 2. 暗褐 10YR3/3 縮り弱い、5~8mmローム塊30%、20~30mmローム塊含む。



第7図 SI-02・P2



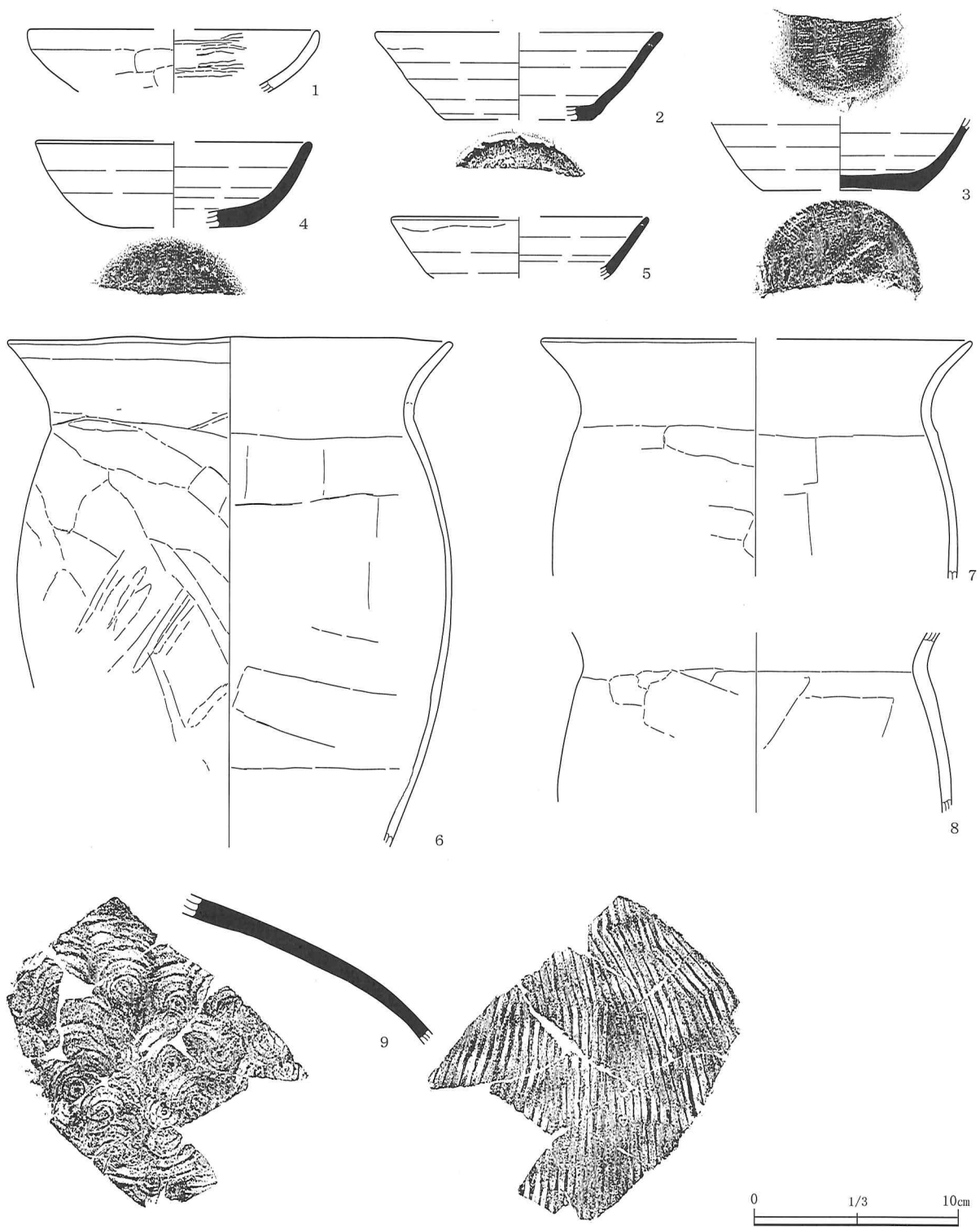
SI-02 カマド

1. 暗褐色 10YR3/3 1～2mmローム粒 30%、3～5mmローム塊 5%含む。
2. 暗褐色 10YR3/4 2～3mmローム粒 40%、10mmローム塊 5%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 2～3mmローム粒 30%、20～70mmローム塊 10%、10～20mm灰黄褐色粘土塊 30%含む。
4. 黒褐色 10YR2/3 2～3mmローム粒 30%、10mm塊 5%、焼土粒含む。
5. 黒褐色 10YR2/3 1～2mmローム粒 20%、焼土粒 10%含む。
6. 黒褐色 10YR2/3 1～2mmローム粒 20%、灰黄褐色粘土、炭化粒混じる。
7. 黒褐色 10YR2/3 1～2mmローム粒 50%、50mm塊、焼土塊、炭化粒混じる。
8. 灰褐色粘土 7.5YR4/2 2～3mm焼土粒 10%含む。
9. 褐色 7.5YR4/3 縮り弱い、10～20mm焼土塊、灰褐色粘土塊混じる。
10. 黒褐色 7.5YR2/2 2～3mmローム粒 30%、3～5mm焼土粒 10%、炭化粒混じる。
11. 黒褐色 7.5YR3/2 2～3mm焼土粒 3%、10～20mmローム塊 10%含む。
12. 暗褐色 10YR3/4 縮り弱い、焼土粒、炭化粒、30～40mmローム塊 5%含む。
13. 黒褐色粘土 10YR3/2 焼土粒混じる。

第8図 SI-02 カマド

第2表 SI-02 出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	(14.1)	—	—	細砂粒少ない	赤褐色 5YR4/6	二次被熱	口縁部ヨコナデ、体底部外面へラ削り、内面横のミガキ。	SI-02 2X	
2	須恵器	坏	(13.9)	4.3	(7.2)	白色粒	暗青灰 5BG4/1	良好	ロクロナデ、底部へラ切り。外面に粘土紐の痕跡。	SI-02 1Y	
3	須恵器	坏	—	—	(7.8)	白色粒、8mm礫	灰 5Y5/1	良好	ロクロナデ、底部へラ切り、外周へラ削り、板状の圧痕、内面刷毛目。	SI-02 No.8	
4	須恵器	坏	(13.3)	4.2	(7.4)	微砂粒、2mm円礫	灰白 2.5Y8/1	やや不良	ロクロナデ。	SI-02 No.11	
5	須恵器	坏	(12.5)	—	—	白色粒、2mm黒色の角礫	黄灰 2.5Y6/1	良好	ロクロナデ。外面に粘土紐の痕跡。	SI-02 No.8	
6	土師器	甕	21.6	—	—	細砂粒多い	明赤褐色 2.5YR5/6	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面斜めへラ削り、内面へラナデ。	SI-02 No.7	P2 出土の甕とカマド覆土出土の破片が接合。
7	土師器	甕	(21.0)	—	—	微砂粒	明赤褐色 2.5YR5/6	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面上位横のへラ削り、内面へラナデ。	SI-02 No.3	
8	土師器	甕	—	—	—	細砂粒	橙 5YR6/6	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面上位斜めへラ削り、内面へラナデ。	SI-02 No.10	
9	須恵器	甕	—	—	—	白色粒	灰 N4/0	普通	外面平行叩き、内面同心円当て具痕。外面白色の自然降灰。	SI-02 No.2 2X	



第9圖 SI-02 出土遺物

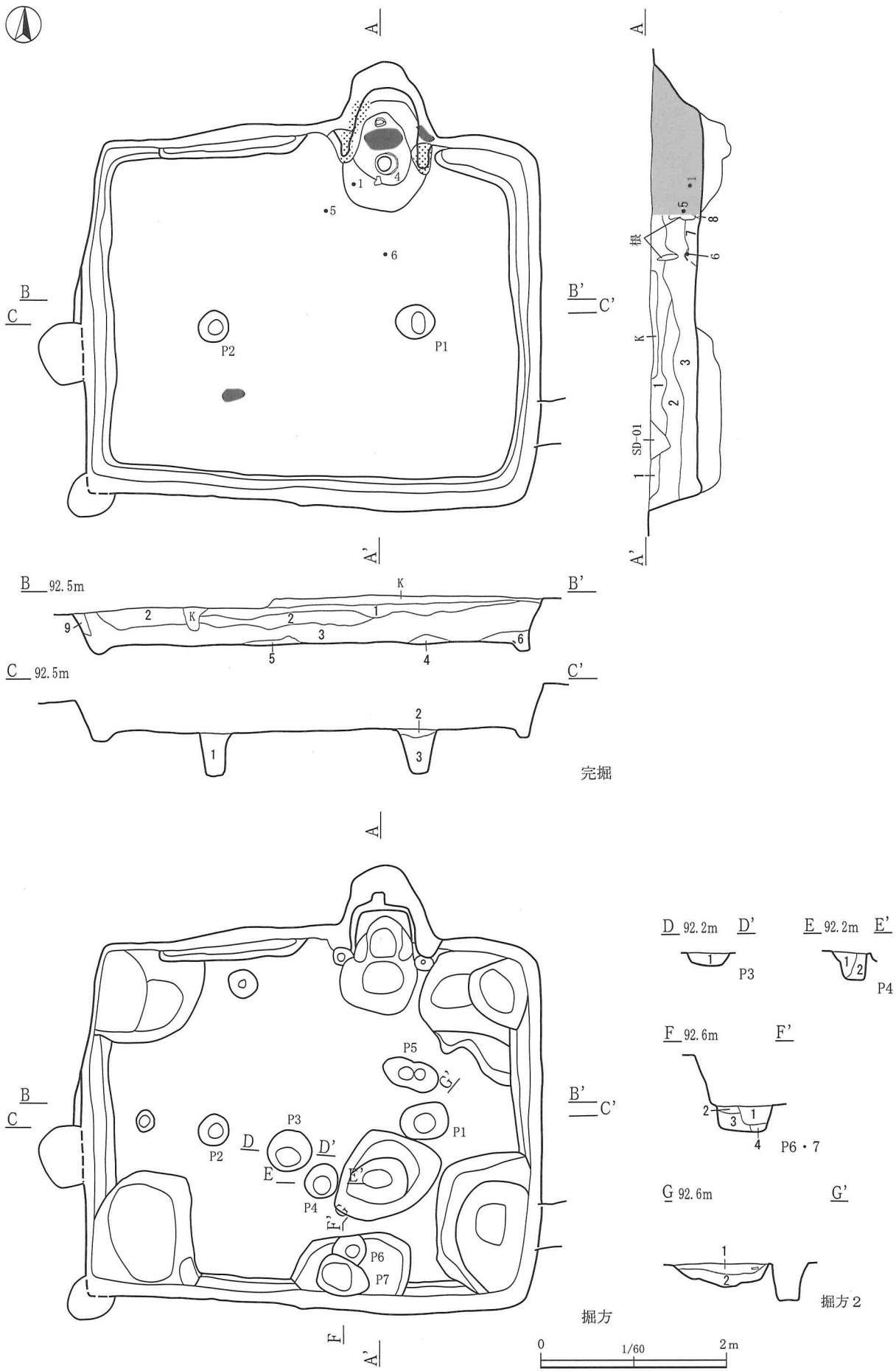
(7) の破片が纏まって出土し、南東隅の覆土下層から須恵器甕(9)の破片が出土した。また、住居中央、覆土中位から川原石が出土したが、そのうちの1点は大きさ、被熱を受けていることからカマドの袖の補強材に使用されていたものと推測される。

SI-03 (第10～12図, 第3表, 図版3・4・7)

本跡は調査区の中央南寄りA-3グリットに位置し、溝跡と北西隅は攪乱に切られている。東側にSB-01が隣接している。西側にはSB-02があり、P1・3が重複しているが壁際ギリギリであるため断定はできないが、本跡が切っているものと推測される。平面形は長方形を呈し、規模は南北4.1m, 東西5.1m, 確認面からの深さ0.5mを測る。主軸方向はN-3°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁以外の壁際の一部に壁溝を確認したが、隅は掘方のために不明瞭である。壁溝は幅25～40cm, 床面からの深さ4cmを測る。床面はローム層を掘り込み平らに硬く仕上げている。P2の南側の床面がわずかに焼けている。隅に掘方が認められ、ローム塊を含んだ黒色土によって埋め戻されている。その他、P1の南側に楕円形の挿鉢状の掘り込みが認められ、この掘り込みの西側にはピット状の掘り込みが2基確認された。また、P1の北側にピット状の掘り込みP5を確認したが、規模から考えて柱穴が想定できるがこれに対応する西側では確認できなかったため、本段階ではいずれのものか不明である。規模は長径63cm, 短径32cm, 深さ50cmである。また、南壁際中央には半円形の掘り込みの中にピットが2基確認され、出入り口のピットと推測される。規模はP6が径35cm, 深さ20cm, P7が径40cm, 深さ30cmを測る。柱穴は中央の東西に2基が確認され、柱痕跡は認められなかった。規模はP1が径52cm, 深さ38cm, P2が径35cm, 深さ42cmを測る。カマドは北壁中央東寄りに設けられ、壁を凸形に掘り込んで作られている。袖は両袖がわずかに遺存し、黒褐色粘土によって作られている。火床は床面より若干窪んでいる。燃焼部と燃焼部右側壁面に焼土が認められた。燃焼部の奥に川原石を利用した支脚が立った状態で遺存していた。また、火床には底部を欠いた土師器甕(4)が逆さまに置かれた状態で出土した。覆土はローム粒や焼土粒を含んだ黒褐色土2～4層によって埋め戻されている。遺物は前記のもの以外、カマド前の覆土下層より須恵器坏(1)土師器甕(6)が出土した。

SI-04 (第13・14図, 第4表, 図版4・5・8)

本跡は調査区の北西B-3グリットに位置する。平面形は方形を呈し、規模は南北2.6m, 東西2.9m, 確認面からの深さ0.5mを測る。主軸方向はN-17°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、遺構の北半分は植物痕の影響からか上位が大きく外傾している。床面はローム層を掘り込み硬く平らに仕上げている。隅には不整形の掘方が掘り込まれ、ローム塊を含んだ黒色土で埋め戻されている。柱穴は認められなかった。南壁際中央にはピットが認められ、出入り口のピットと推測される。規模は径40cm, 深さ21cmを測る。カマドは北壁中央東寄りに設けられ、壁を凸形に掘り込んで作られている。カマドの両側に認められるピット状の掘り込みは攪乱と判断される。袖は僅かに残り、黒褐色粘土で作られている。火床は床面よりわずかに低いと推測されるが、焼土は認められなかった。煙道部奥壁面に焼土が若干確認された。覆土はローム塊を含んだ黒褐色土1～3層で埋め戻されて



第10图 SI-03·掘方

SI-03

1. 黒褐 10YR2/2 縮まる、1mmローム粒3%含む。自然堆積。
2. 黒褐 10YR2/3 縮まる、1~2mmローム粒10%、焼土粒5%含む。埋め戻し。
3. 黒褐 7.5YR2/2 縮り普通、1~2mmローム粒30%、焼土粒5%含む。埋め戻し。
4. 黒褐 10YR2/3 やや縮まる、1mmローム粒10%、5~10mm塊10%含む。埋め戻し。
5. 黒褐 10YR2/3 やや縮まる、ローム40%混じる。
6. 黒褐 10YR2/3 縮り弱い、1mmローム粒10%含む。
7. 暗褐 10YR3/4 1mmローム粒20%、焼土粒10%含む。
8. 暗褐 10YR3/3 粘土混じる、1~2mmローム粒10%、3~5mm焼土粒20%含む。
カマド覆土の流出土。
9. 暗褐 7.5YR3/3 縮り弱い、3~5mmローム粒20%含む。

SI-03 P1・2

1. 褐 7.5YR4/3 縮り弱い、10mmローム塊3%、黒褐色土混じる。
2. 黒褐 10YR2/3 0.5~1mmローム粒10%含む。
3. 暗褐 10YR3/4 2~3mmローム粒10%、20~30mmローム塊5%含む。

SI-03 P3

1. 暗褐 10YR3/3 1~2mmローム粒30%、20~30mmローム塊5%含む。

SI-03 P4

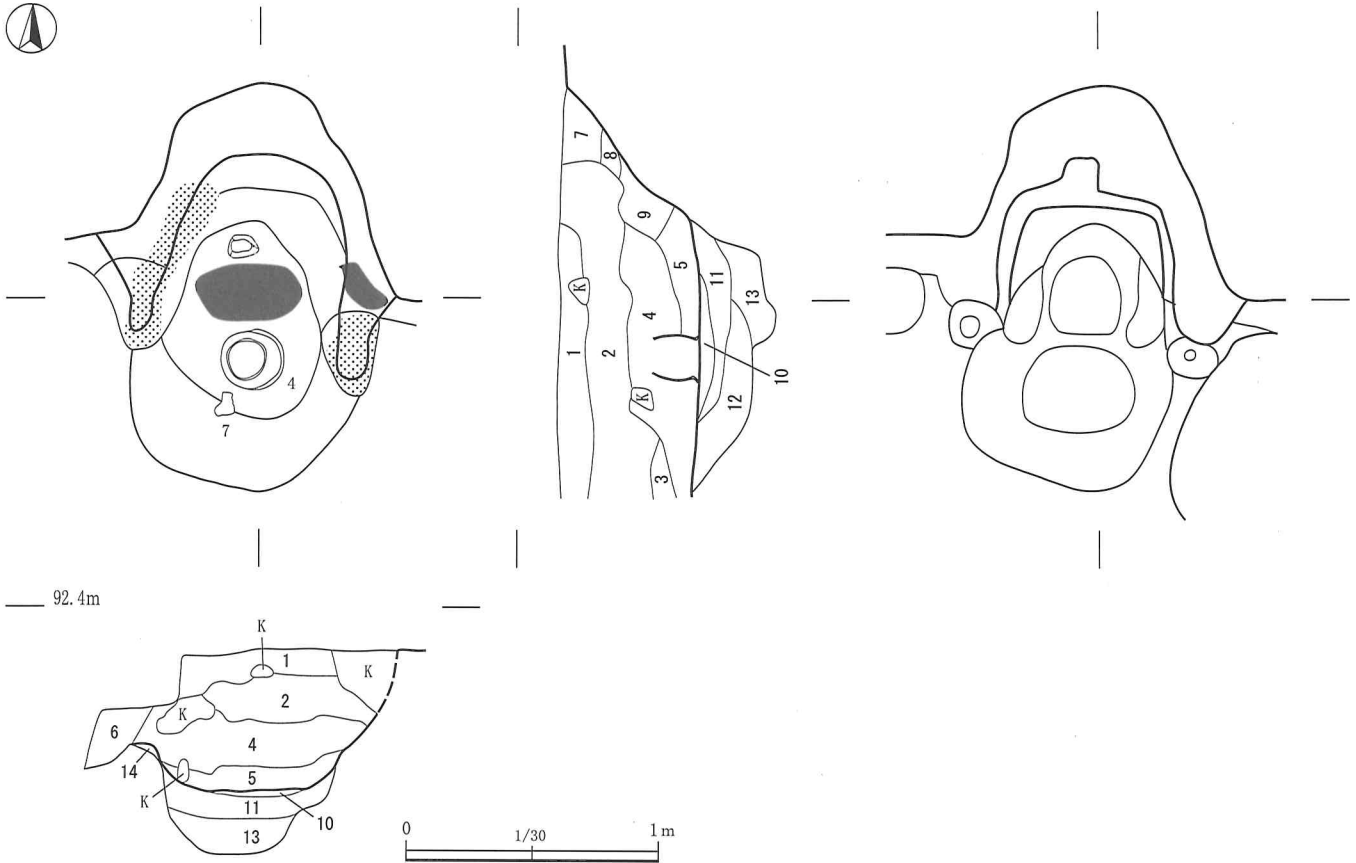
1. 黒褐 10YR3/2 20~50mmローム塊40%含む。
2. 黒褐 10YR2/3 30mmローム塊、ローム土混じる。

SI-03 P6・7

1. 黒褐 10YR3/2 1~2mmローム粒20%含む。
2. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒20%、10mm塊3%含む。
3. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒30%、10mm塊5%含む。
4. 褐 7.5YR4/4 10mmローム塊混じる。

SI-03 掘方2

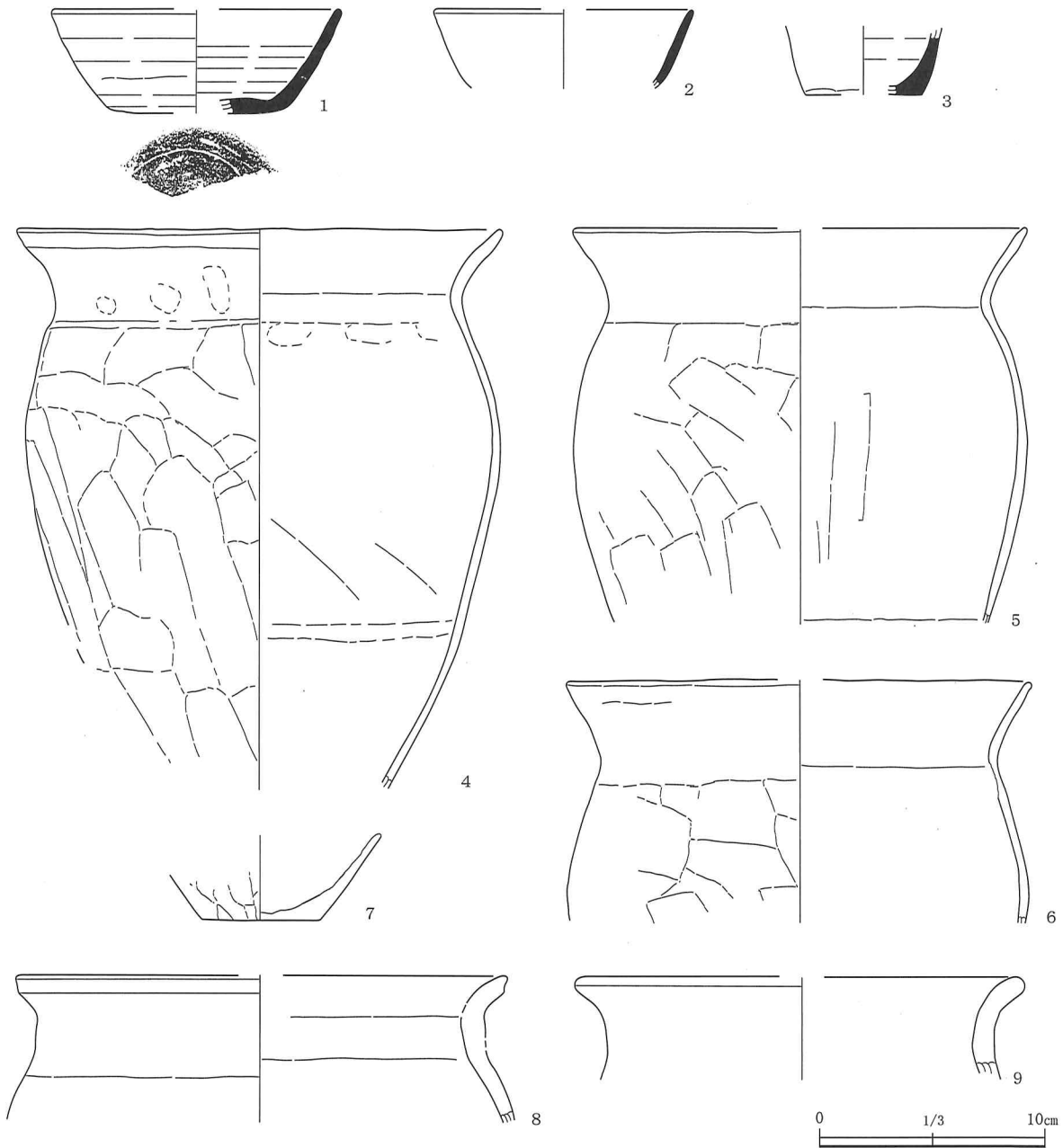
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒10%、3~4mm焼土粒、5~10mmローム塊3%含む。
2. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒20%、10~30mm塊20%含む。



SI-03 カマド

1. 黒褐 10YR2/3 0.5~1mmローム粒10%、5~8mm焼土塊3%含む。
2. 黒褐 10YR3/2 0.5~1mmローム粒10%、5~8mm焼土塊5%含む。
3. 黒褐 10YR2/3 3~5mm焼土粒5%含む。
4. 暗褐 10YR3/3 3~4mmローム粒10%、5~8mm焼土塊5%、15mmローム塊混じる。
5. 褐色粘土 7.5YR4/3 3~5mm焼土塊5%含む。
6. 黒褐 7.5YR3/2 2~3mmローム粒20%、3~5mm焼土粒5%含む。
7. 褐色粘土 7.5YR4/3 50mm褐色粘土塊、1~2mmローム粒10%、3~5mm焼土塊5%含む。
8. 褐 7.5YR4/4 3~5mmローム粒5%含む。
9. 褐 7.5YR4/3 5~10mm焼土塊10%、10mmローム塊5%含む。
10. 黒褐 7.5YR3/2 縮まる、粘性、5~10mmローム塊3%、2~3mmローム粒、焼土粒3%含む。
11. 黒褐 10YR3/2 20~25mmローム塊10%、焼土塊含む。
12. 黒褐 10YR3/2 10mmローム塊5%、ローム粒、焼土粒20%含む。
13. 暗褐 10YR3/4 縮り弱い、10~20mmローム塊10%含む。
14. 黒褐色粘土 10YR3/2

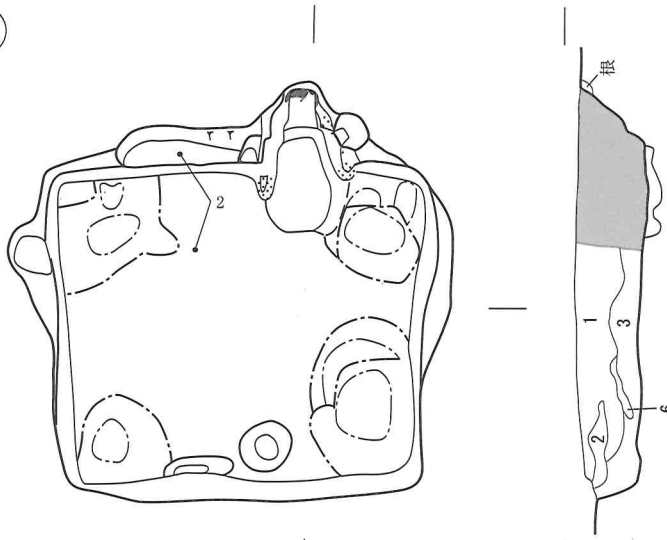
第11図 SI-03 カマド



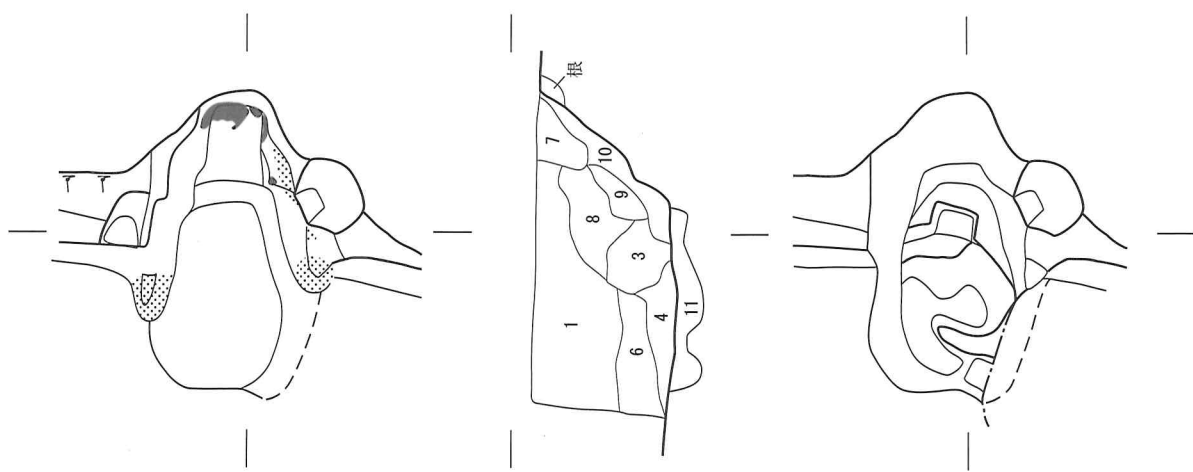
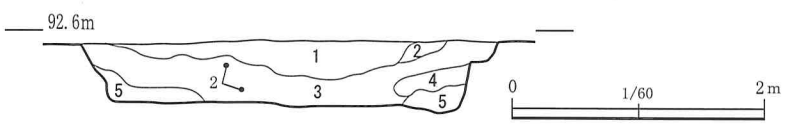
第 12 図 SI-03 出土遺物

第 3 表 SI-03 出土遺物観察表

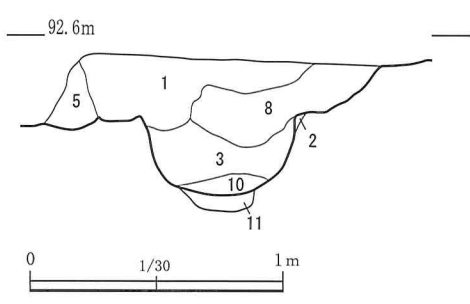
番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(12.7)	4.6	(7.1)	白色粒、2~3mm礫	灰 5Y4/1	普通	ロクロナデ、底部ケズリ。外面に粘土紐痕。	SI-03 No. 5	
2	須恵器	坏	(11.4)	-	-	白色粒	灰 N5/0	普通	ロクロナデ。	SI-03 3X	
3	須恵器	コップ形土器	-	-	(5.2)	微砂粒	灰 5Y4/1	良好	ロクロナデ、体部下端、底部へら削り。	SI-03 4X	
4	土師器	甗	21.4	-	-	細砂粒	明赤褐 2.5YR5/6	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面上位横のへら削り、中位斜めへら削り、下位縦のへら削り、内面上位指押しえ痕、へらナデ。	SI-03 No. 7	
5	土師器	甗	-	-	-	細砂粒多い	赤褐 5YR4/6	普通	口縁部ヨコナデ、体部外面斜めへら削り、内面へらナデ。	SI-03 No. 4	復元実測
6	土師器	甗	(20.6)	-	-	細砂粒	橙 5YR6/6	普通	口縁部ヨコナデ、体部外面上位横のへら削り、中位縦のへら削り、内面へらナデ。	SI-03 No. 3	5と同一個体の可能性
7	土師器	甗	-	-	5.3	微砂粒	にぶい赤褐 5YR4/4	普通	体部外面、底部へら削り。	SI-03 No. 6	
8	土師器	甗	(21.5)	-	-	石英砂、雲母	明赤褐 5YR5/6	普通	口縁部ヨコナデ、内面へらナデ。	SI-03 3X	
9	土師器	甗	(19.2)	-	-	石英砂、金色の雲母	にぶい赤褐 5YR4/4	普通	口縁部ヨコナデ。	SI-03 1X	



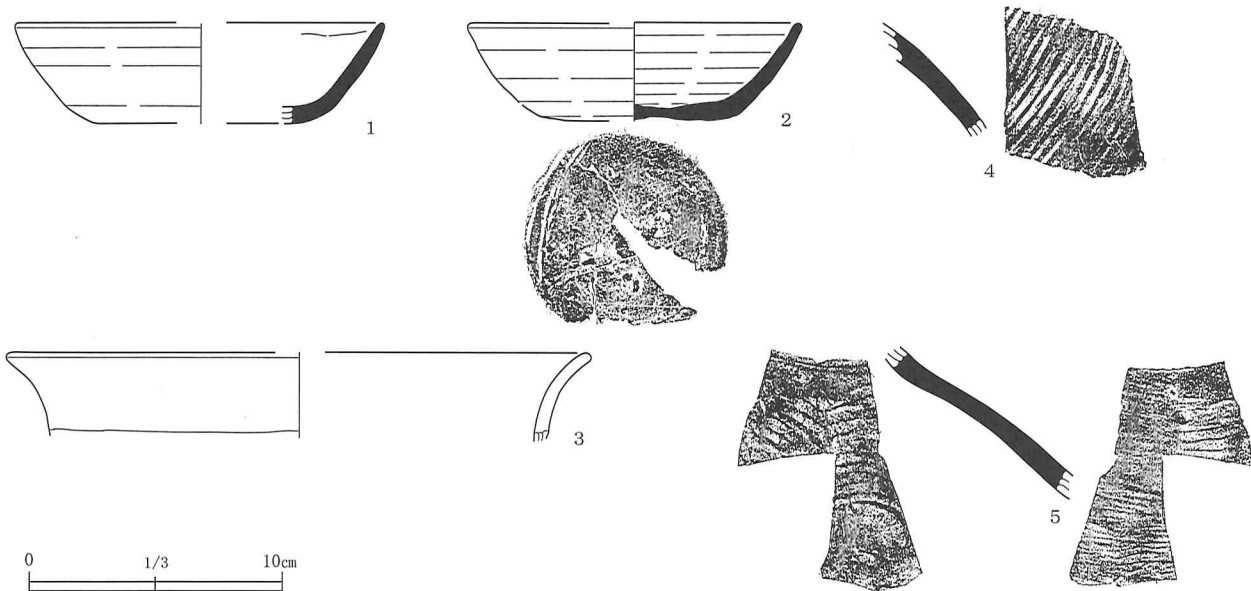
- SI-04
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒 30%、5mm塊、8~10mm塊、炭化粒 10%含む。
 2. 黒 10YR2/1 締り強い、2~3mmローム粒 10%含む。
 3. 黒褐 10YR2/2 1~2mmローム粒 20%、30~50mmローム塊 5%、小礫混じる。
 4. 黒褐 10YR2/2 1~2mmローム粒 5%、10mm塊、炭化粒、焼土粒含む。
 5. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒 10%、炭化粒、小礫混じる。
 6. 黒褐 10YR2/2 1~2mmローム粒 5%含む。



- SI-04 カマド
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒 30%、5~8mmローム塊 3%含む。
 2. 灰黄褐色粘土 10YR4/2 3~4mm焼土粒 3%含む。
 3. 灰黄褐色粘土 10YR4/2 焼土粒、40mmローム塊、黒褐色土混じる。
 4. 黒褐 10YR2/3 20mmローム塊 30%、5~20mm焼土塊 5%、灰黄褐色粘土混じる。
 5. 暗褐 10YR3/3 0.5~1mmローム粒 10%、20mm塊 5%含む。
 6. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒 20%、3~5mm焼土粒 5%、ローム塊混じる。
 7. 暗褐 10YR3/3 10mm灰黄褐色粘土塊、3~5mmローム粒、焼土粒混じる。
 8. 黒褐 10YR2/3 20mm灰黄褐色粘土塊 10%、黒色土塊 20%、2~3mmローム粒、焼土粒含む。
 9. 黒褐 7.5YR3/2 3~5mm焼土塊 30%、灰黄褐色粘土混じる。
 10. 黒褐 10YR3/2 3~5mm焼土塊 20%、ローム混じる。
 11. 暗褐 7.5YR3/3 2~3mmローム粒 20%、3~5mm焼土粒、10~20mmローム塊 10%含む。



第13図 SI-04・カマド



第 14 図 SI-04 出土遺物

第 4 表 SI-04 出土遺物観察表

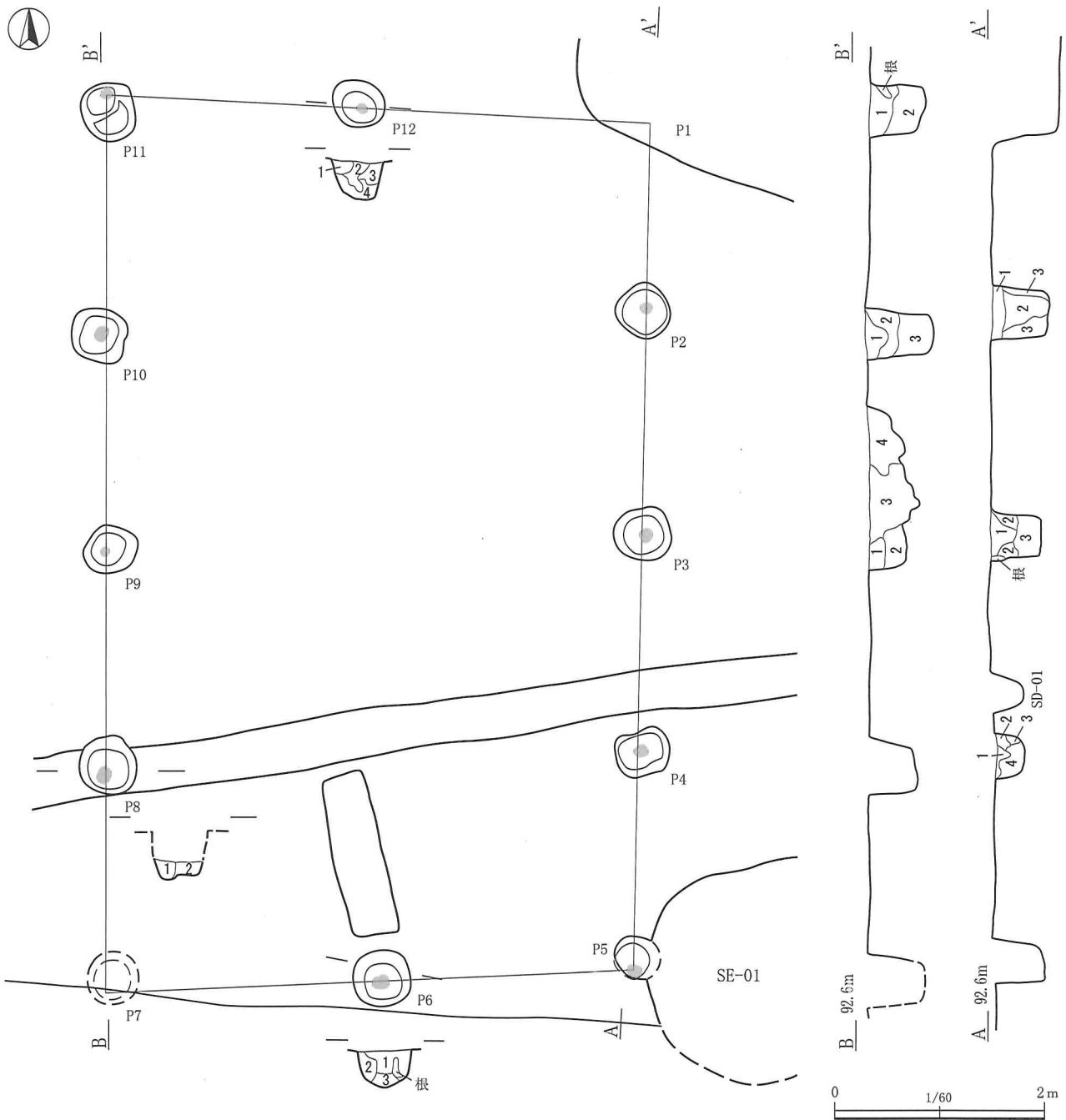
番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(14.6)	4.0	(8.2)	白色粒	灰 5Y5/1 灰白 2.5Y8/1	二次被熱	ロクロナデ、底部ケズリ。	SI-04 3 X	
2	須恵器	坏	(13.1)	3.9	7.8	白色粒、2mm礫	灰 5Y5/1	良好	ロクロナデ、底部ヘラ切り。	SI-04 No.1・2	底部ヘラ記号
3	土師器	甗	(23.0)	-	-	微砂粒	明赤褐 2.5YR5/6	普通	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ削り。	SI-04 1 X	
4	須恵器	甗	-	-	-	微砂粒、2mm礫	にぶい黄橙 10YR6/3	やや不良	外面平行叩き、内面ナデ。	SI-04X	
5	須恵器	甗	-	-	-	白色粒	黄灰 2.5Y4/1	良好	外面平行叩き、内面頸部ヨコナデ、体部同心円当て具痕。外面白色の自然降灰。	SI-04 1 X	

いる。遺物は北壁際の中層から須恵器坏（2）が出土した他は細片である。

2 掘立柱建物跡

SB-01（第 15 図，図版 5）

本跡は調査区の中央南寄り A・B- 2・3 グリットに位置し、溝に P8 が切られ、P7 は覆土が若干確認面で認められたが、ほとんど攪乱により遺存していなかった。また、P1 は SI-02 の南西隅に位置するものと推測されるが、SI-02 の覆土が多量のローム塊によって埋め戻されていたため確認することができなかった。P5 は SE-01 と重複するが、植物根により新旧関係を捉えることができなかった。遺構は南北 4 間，東西 2 間の南北棟で、規模は柱間で南北約 8.6 m，東西 5.2 m を測る。主軸方向はほぼ北を示す。柱間間隔は東辺が北から (1.8 m) + 2.15 m + 2.1 m + 2.05 m，西辺が北から 2.3 m + 2.1 m + 2.15 m + (2.05 m)，北辺が東から (2.75 m) + 2.45 m，南辺が東から 2.4 m + 2.65 m を測る。柱掘方は平面形が円形或は隅丸方形を呈し、規模は径 45 ~ 50 cm，深さは確認面から 30 ~ 65 cm を測る。柱掘方はいずれも底面に一段低くなった部分や硬化した部分が認められ、柱当たりと推測される。覆土は黒褐色土および暗褐色土によって埋め戻されている。遺物は何も出土しなかった。



SB-01 P2

1. 黒褐色 10YR2/3 1~2mmローム粒 30%、10mmローム塊 5%含む。
2. 黒褐色 10YR3/2 縮り弱い、2~3mmローム粒 20%、10mm塊混じる。
3. 黒褐色 10YR2/3 1~2mmローム粒 10%、50mm塊 20%含む。

SB-01 P3

1. 黒褐色 10YR2/3 2~3mmローム粒 30%、5~10mm塊 5%含む。
2. 暗褐色 10YR3/3 3~5mmローム粒 20%、10~30mm塊 10%含む。
3. 黒褐色 10YR2/3 縮り弱い、50mmローム塊混じる。

SB-01 P4

1. 黒褐色 10YR2/3 2~3mmローム粒 3%、30mm塊混じる。
2. 黒褐色 10YR2/3 2~5mmローム粒 5%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 縮り弱い、ローム土混じる。
4. 暗褐色 10YR3/3 縮り弱い、3~5mmローム粒 5%、5~20mm塊 30%含む。

SB-01 P6

1. 黒褐色 10YR2/2 1~2mmローム粒 5%含む。
2. 黒褐色 10YR2/3 2~3mmローム粒 20%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 縮り強い、10~20mmローム塊 30%含む。

SB-01 P8

1. 黒褐色 10YR2/3 10mmローム塊 10%含む。
2. 暗褐色 10YR3/3 20~30mmローム塊 50%含む。

SB-01 P9

1. 黒褐色 10YR2/2 0.5~1mmローム粒 20%含む。
2. 黒褐色 10YR2/3 1~2mmローム粒 20%、10~15mm塊 20%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 1~2mmローム粒 25%、10mm塊 5%含む。
4. ローム、クラックが入り暗褐色土混入。

SB-01 P10

1. 黒褐色 10YR2/2 2~3mmローム粒 20%、10mm塊混じる。
2. 暗褐色 10YR3/4 20~30mmローム塊 20%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 1~2mmローム粒 50%含む。

SB-01 P11

1. 黒褐色 10YR2/2 2~3mmローム粒 10%、10mm塊 5%含む。
2. 黒褐色 10YR2/3 2~3mmローム粒 50%、10~30mmローム塊 5%含む。

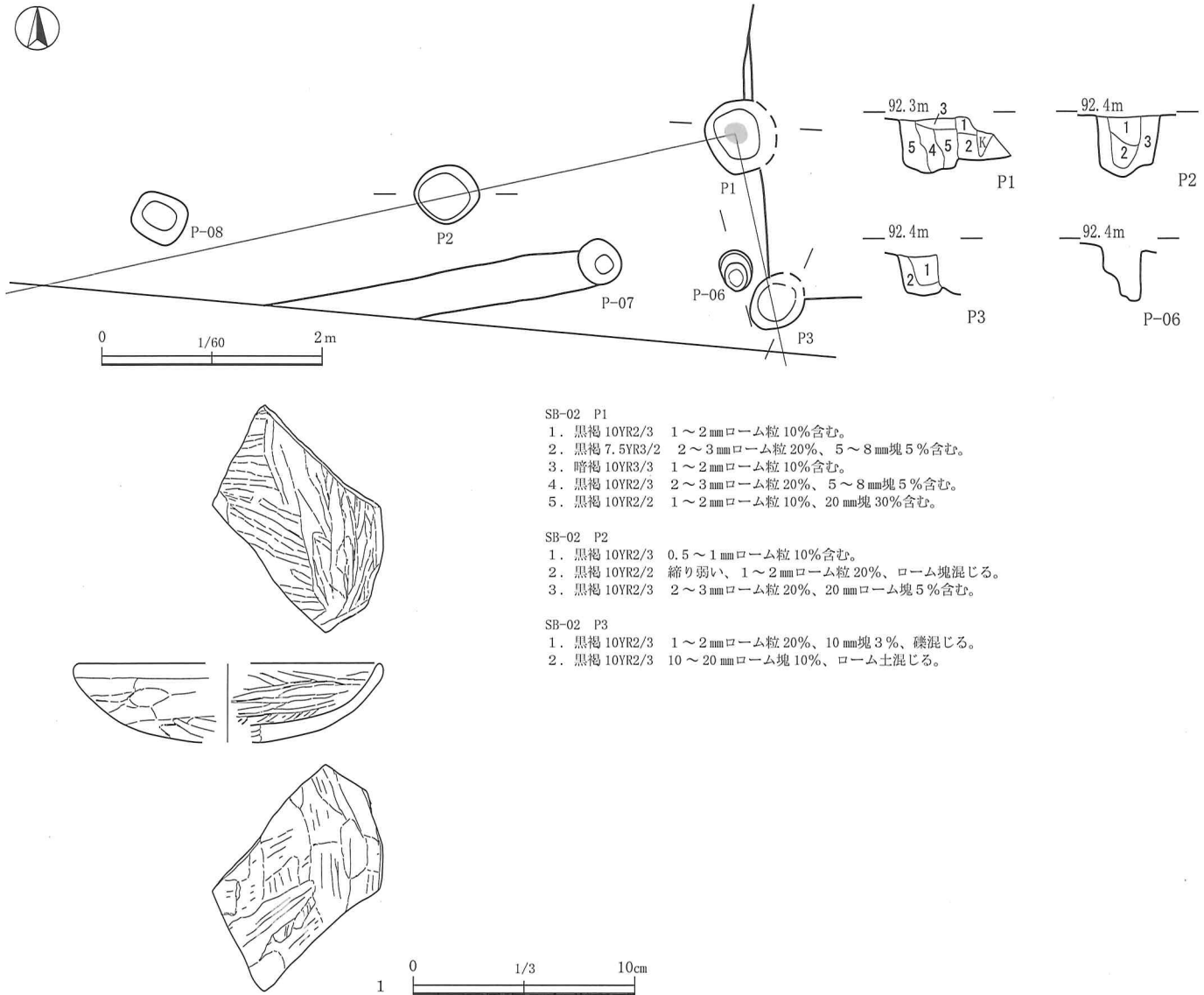
SB-01 P12

1. 黒褐色 10YR2/3 1~2mmローム粒 20%含む。
2. 黒褐色 10YR2/3 1~2mmローム粒 20%、5~10mm塊 3%含む。
3. 暗褐色 10YR3/3 2~3mmローム粒 20%、5~20mm塊 5%含む。
4. 暗褐色 10YR3/4 縮り強い、20mmローム塊 30%含む。

第 15 図 SB-01

SB-02 (第16図, 第5表, 図版5・8)

本跡は調査区の南西A-3・4グリットに位置している。SI-03に隣接するP1が明確な柱掘方であったことから周辺を精査した結果、P2・3を確認し掘立柱建物跡と推測した。東側のSI-03内及び北側には柱掘方を確認することができなかったことから調査区外に延びているものと推察される。柱間間隔から建物は東西棟と推察される。主軸方向はN-76°-Eを示す。柱間間隔は南北1.6m, 東西2.7mを測る。柱掘方は平面形が隅丸方形で、規模は径50~65cm, 確認面からの深さ35~55cmを測る。P2は底面中央がやや窪んでおり、土層断面から柱当たりと推察される。覆土は黒褐色土によって埋め戻されている。遺物はP1の覆土から土師器坏(1)が出土した。



- SB-02 P1
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒 10%含む。
 2. 黒褐 7.5YR3/2 2~3mmローム粒 20%、5~8mm塊 5%含む。
 3. 暗褐 10YR3/3 1~2mmローム粒 10%含む。
 4. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒 20%、5~8mm塊 5%含む。
 5. 黒褐 10YR2/2 1~2mmローム粒 10%、20mm塊 30%含む。
- SB-02 P2
1. 黒褐 10YR2/3 0.5~1mmローム粒 10%含む。
 2. 黒褐 10YR2/2 縮り弱い、1~2mmローム粒 20%、ローム塊混じる。
 3. 黒褐 10YR2/3 2~3mmローム粒 20%、20mmローム塊 5%含む。
- SB-02 P3
1. 黒褐 10YR2/3 1~2mmローム粒 20%、10mm塊 3%、礫混じる。
 2. 黒褐 10YR2/3 10~20mmローム塊 10%、ローム土混じる。

第16図 SB-02・出土遺物

第5表 SB-02 出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	(13.9)	3.6	-	微砂粒、赤褐色粒	橙 5YR6/6	良好	口縁部ヨコナデ、体・底部外面へラ削り、内面ミガキ。	SB-02P1X	

SB-03 (第 17 図, 図版 5)

本跡は調査区の南東隅 A-1 グリットに位置し, 調査区外に延びているものと推察される。主軸方向は N-5° -E を示す。柱間間隔は西辺で北から 2.05 m + 2.45 m, 北辺で 2.3 m を測る。柱掘方は平面形が隅丸方形で, 規模は径 50 ~ 55 cm, 確認面からの深さ 50 ~ 75 cm を測る。何れの柱掘方の底面もやや窪んでおり柱当たりが推察される。覆土はローム塊を含んだ黒褐色土によって埋め戻されている。遺物は何も出土しなかった。なお, P5-P7 の柱間間隔が狭いうえに P6 が重複し, また, P4 の東側に位置する P2・3 の存在から別の建物の存在が想定されるが即断はできない。遺物は何も出土しなかった。

3 ピット (第 6 表)

前記したように今次調査で確認したピットの内, 掘立柱建物跡 1 棟, 掘立柱建物跡を推測されるもの 2 棟を抽出したがその他, 掘立柱建物跡を想定することが困難なピットが 10 基確認されている。遺構検出作業では多くのピット状の落ち込みを確認したが, 半截掘削の結果, 覆土, 掘り込みの形状から植物根と考えられるものに関しては記録を除外した。その結果, 遺構と判断し得たものに関して第 4 図全体図, 第 16 図 SB-02・出土遺物, 第

第 6 表 ピット計測表

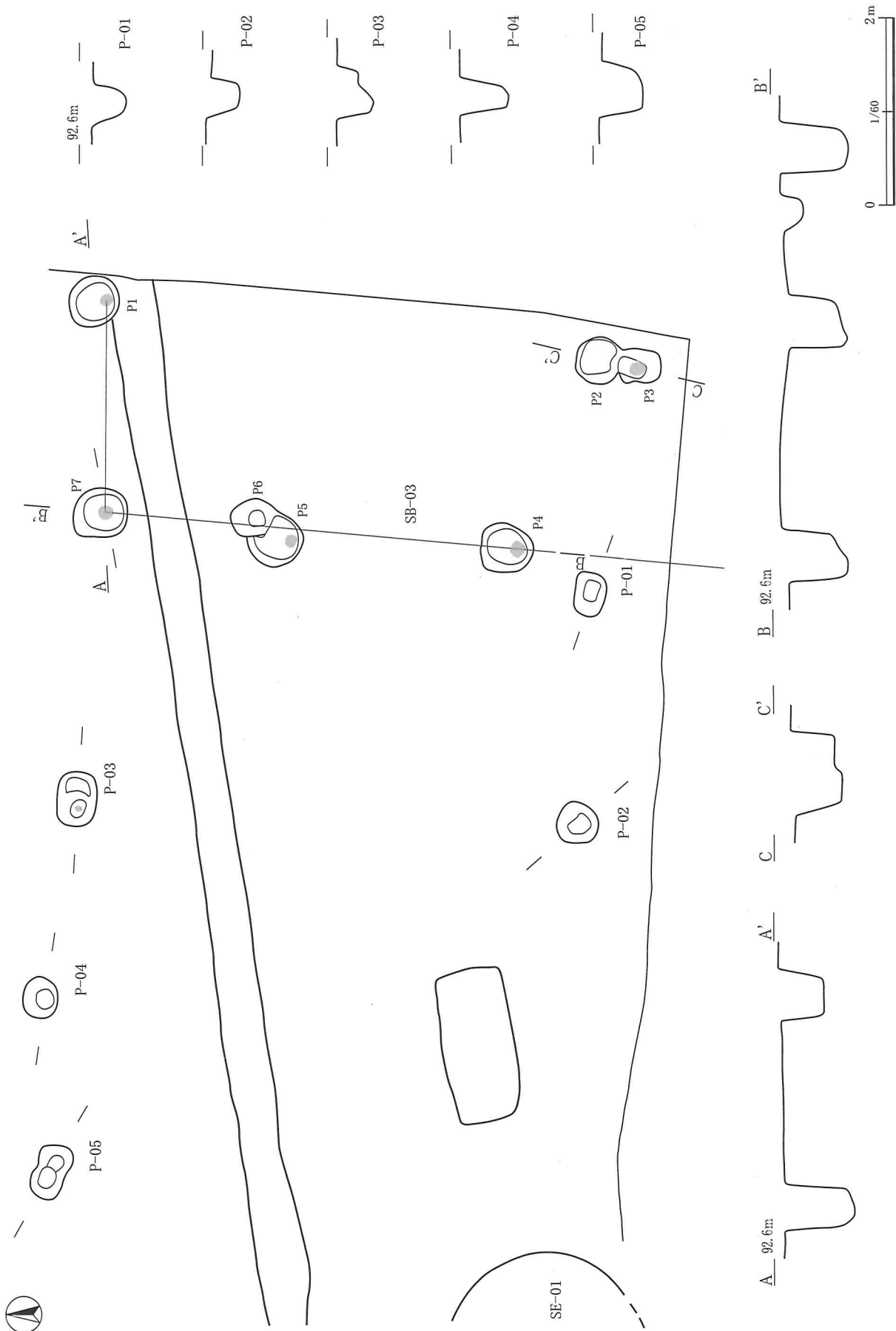
番号	径	深さ
P-01	47*33	35
P-02	44*45	37
P-03	58*42	40
P-04	43*38	56
P-05	62*36	49
P-06	38*30	47
P-07	40*38	34
P-08	47*43	26
P-09	32*30	40
P-10	43*40	35

17 図 SB-03・ピットに図示した。P-03 ~ P-05 は SB-03 の北辺の西側延長線上にあるものの, 柱掘方が SB-03 とは異なる形状を示していることから別の遺構と判断したが, 建物跡を復元するには至らなかった。他のピットにしても伴うピットを抽出できず, 図らずも単独の記載となってしまった。これらのピットについては, 計測表を提示することとする。

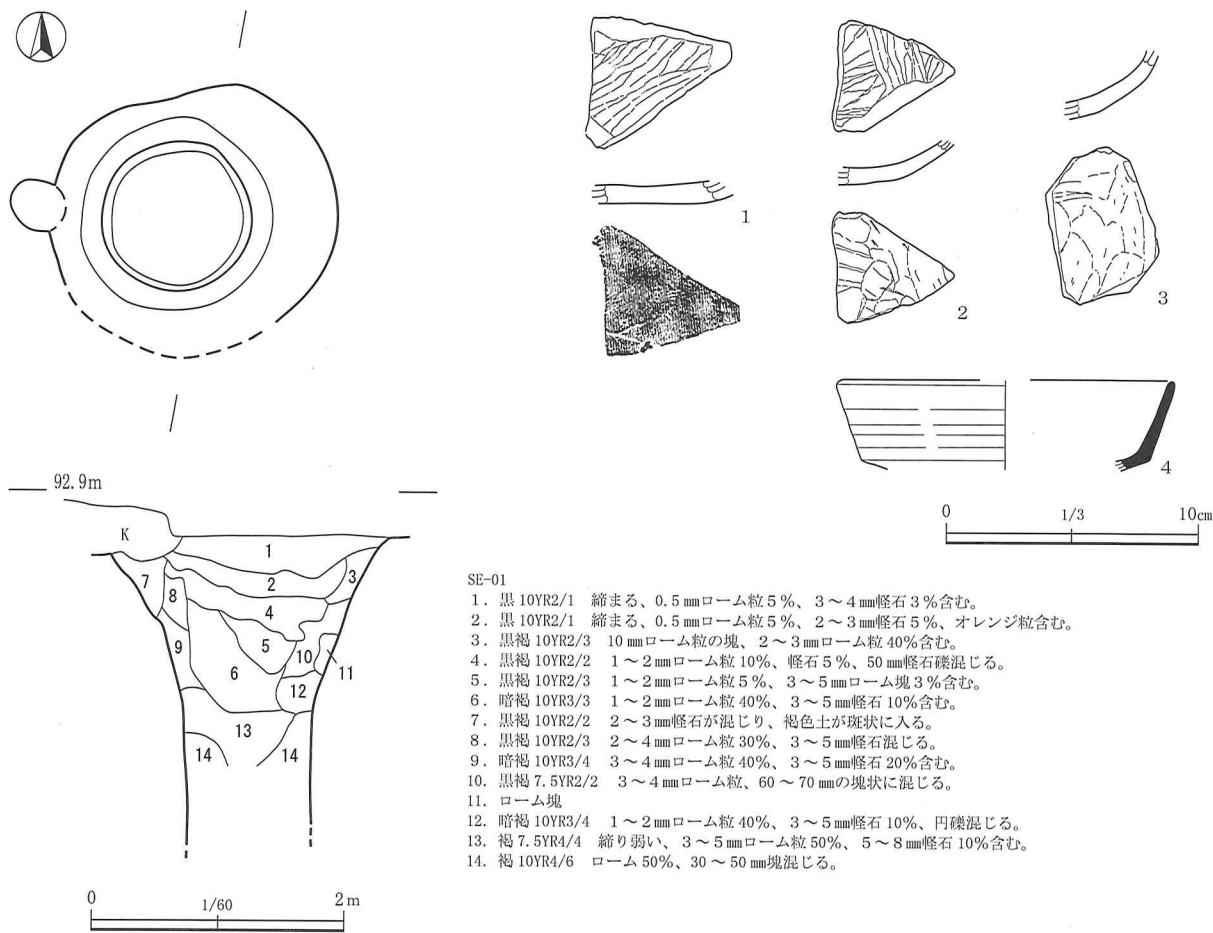
4 井戸跡

SE-01 (第 18 図, 第 7 表, 図版 5・8)

本跡は調査区の中央南端 A-2 グリットに位置し, SB-01 の P5 と重複するものの植物根の攪乱により新旧関係は不明である。平面形が円形の素掘りの井戸で, 規模は上面径が 2 × 2.3 m, 下位の径は 1.5 m を測り, 確認面から深さ 2.5 m まで掘削した。上位ローム層から上は外傾するが, 下位ローム層から鹿沼層にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。覆土は下層が褐色土 13・14 層を主体とした埋め戻しで, 上層は黒色土・黒褐色土の自然堆積を示す。遺物は上層から土師器坏, 須恵器坏の細片が出土した。



第17図 SB-03・ピット



第18図 SE-01・出土遺物

第7表 SE-01 出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	—	—	—	微砂粒	にぶい赤褐色 2.5YR4/4	普通	底部外面へラ削り、内面ミガキ。底部中央に木炭痕。	SE-01X	
2	土師器	坏	—	—	—	微砂粒、赤褐色粒	明赤褐色 2.5YR5/6	普通	体底部外面へラ削り、内面ミガキ。	SE-01X	
3	土師器	坏	—	—	—	微砂粒	浅黄褐色 7.5YR8/6	普通	口縁部ヨコナデ、体底部外面へラ削り、内面ロクロナデ。	SE-01X	
4	須恵器	高台付坏	(13.3)	—	—	白色粒、2mm礫	灰 N4/0	良好	ロクロナデ。	SE-01X	

第4章 総括

今次調査の結果、古代の遺構として竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡及びその可能性のある建物跡3棟、井戸跡1基を確認した。

竪穴住居跡は全掘したSI-02・03・04についてみる。平面形は方形がSI-02・04、長方形がSI-03である。壁溝はSI-03・04で確認し、SI-02では認められなかった。柱穴はSI-02・03が2本を確認し、SI-04は認められない。掘方はSI-03・04が隅を掘り込みローム塊を含んだ黒色土で埋め戻されていたのに対し、SI-02は褐色土を主体に埋め戻し、特に床面中央は5～10cmの厚さに貼床が認められる。カマドの位置は何れも北壁に設けられ、その中央に位置しているのがSI-02、中央やや東寄りに位置しているのがSI-03・04である。カマドはSI-03・04で袖が確認でき、SI-03は袖の基部がロームを掘り残して作られている。SI-02は壁への掘り込みが凸状を呈し、燃焼部の左右両壁には段が設けられている。段までの壁面はロームで熱を受け赤化していた。段には構築材の粘土が若干残されている。すなわち、段から持ち送りで構築材が積まれ、カマド天井部が作られていたものと推察される。また、住居跡覆土中から川原石が出土し、川原石は表面が熱を受け一部赤化し、クラックが入っていた。この川原石はその大きさと状態により、カマドの袖に据え付けられていたものと推察される。川原石の他、P2の覆土中からは土師器甕(6)が出土しているが、この土師器甕の体部下半部の破片はカマドの覆土から出土している。カマドで使われていた土師器甕が廃棄にあたって柱を抜き取ったP2に捨てられ、破損した体部片がカマド覆土に残されたものであろう。また、カマド袖石は引き抜かれ、最後に住居埋め戻しとともに廃棄されたものと推察される。SI-03のカマドでは体部下半部を欠いた土師器甕(4)が、口縁部を火床につけ逆位の形で出土した。燃焼部には川原石の支脚が遺存している。SI-02・03のカマドに使用された土師器甕の出土状況は、カマドの廃棄方法の一例として捉えることができよう。

遺構の時期を推考するにあたって出土遺物のうち参考とした資料は以下の通りである。

SI-01：須恵器坏(3・4)、蓋(1)

坏(3)は口径推定13.9cm、底径7.2cm、器高3.6cm。底部糸切り、二次底部面を持っている。坏(4)は口径推定14.5cm、底径推定9.2cm、器高3.7cm。底部糸切り後外周手持ちヘラ削り。焼成が弱く三稜産と推測される。蓋(1)は口径15.6cm。上部が平坦で、摘みの剥離痕は渦巻き状の溝が掘られ、摘みを貼り付けた後剥がれ落ちないようにしている。胎土に雲母を含み、常陸産と推測される。

SI-02：須恵器坏(2・3・4)、土師器甕(6)

坏(2)は口径推定13.9cm、底径推定7.2cm、器高4.3cm。体部は底部から直線的に立ち上がり、底部はヘラ切り。坏(3)は底径7.8cm。底部ヘラ切り。坏(4)は口径推定13.3cm、底径推定7.4cm、器高4.2cm。甕(6)は口径21.6cm。口縁部の断面がくの字状を呈し、体部外面は斜めヘラ削り。武蔵型甕である。

SI-03：須恵器坏(1)、土師器甕(4)

坏(1)は口径推定12.7cm、底径推定7.1cm、器高4.6cm。底部ヘラ切り。甕(4)は口径21.4cm。口縁部の断面がくの字状を呈し、体部外面上位は横方向、下位は縦方向の



SI-01 完掘 (南から)



SI-01 掘方 (南から)



SI-01 カマド完掘 (南から)



SI-01 カマド掘方 (南から)



SI-01 遺物出土状況 (南から)



SI-01 土層断面 (南から)



SI-02 完掘 (南から)



SI-02 掘方 (南から)



SI-02 カマド完掘 (南から)



SI-02 カマド掘方 (南から)



SI-02P2 遺物出土状況 (南から)



SI-02 土層断面 (南から)



SI-03 完掘 (南から)



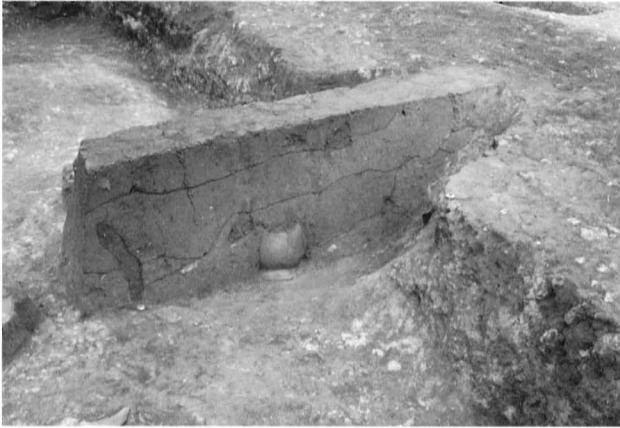
SI-03 掘方 (南から)



SI-03 カマド完掘 (南から)



SI-03 カマド掘方 (南から)



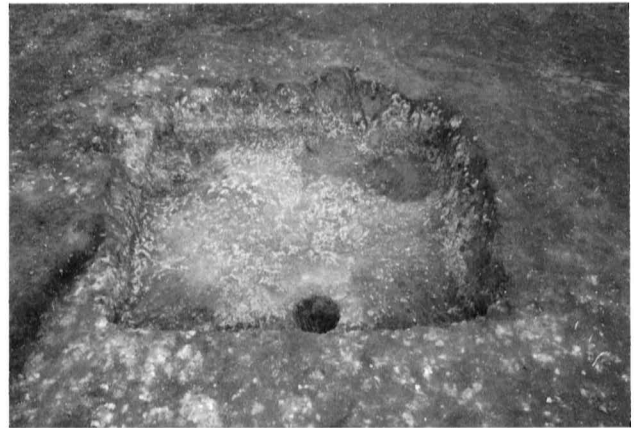
SI-03 カマド土層断面 (南東から)



SI-03 遺物出土状況 (南西から)



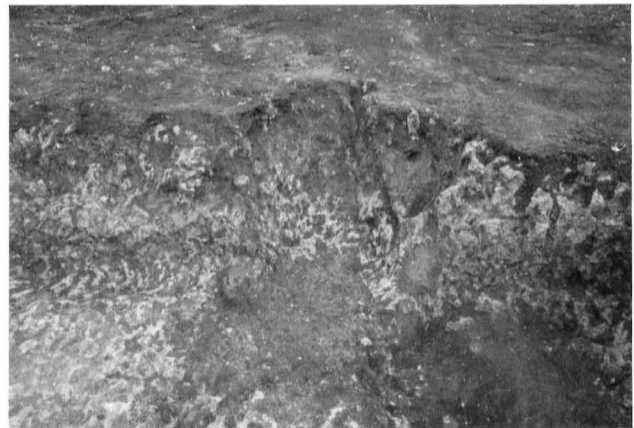
SI-03 土層断面 (東から)



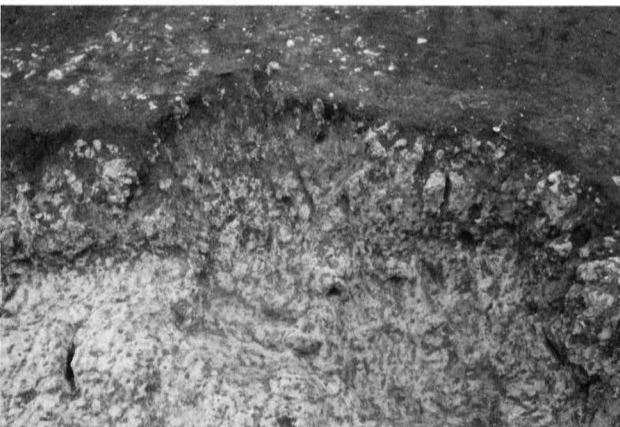
SI-04 完掘 (南から)



SI-04 掘方 (南から)



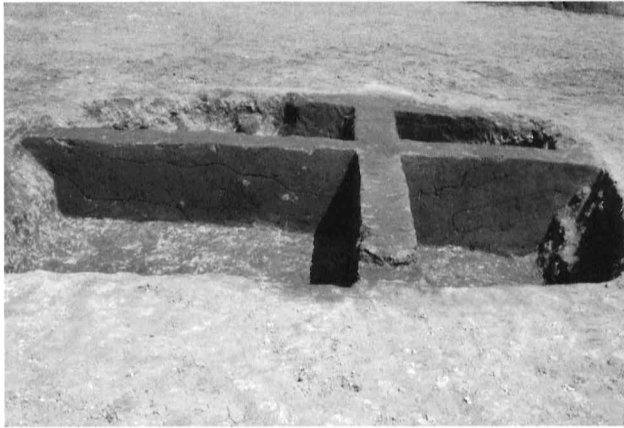
SI-04 カマド完掘 (南から)



SI-04 カマド掘方 (南から)



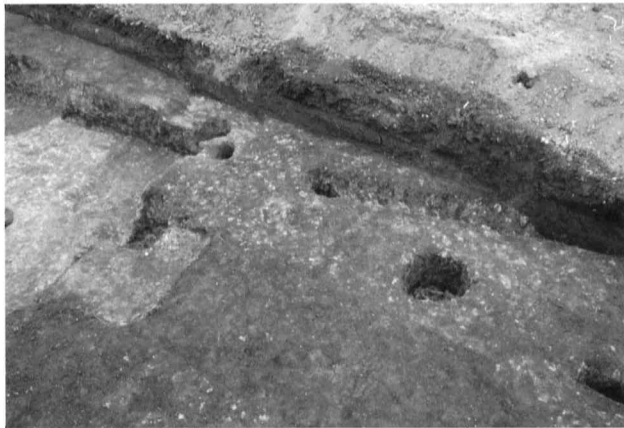
SI-04 遺物出土状況 (南から)



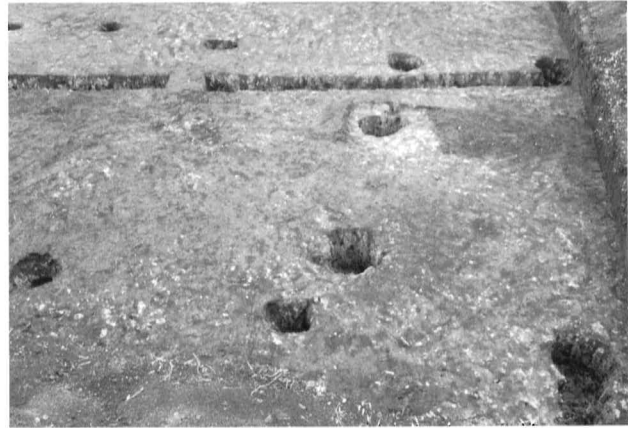
SI-04 土層断面 (南から)



SB-01 完掘 (南から)



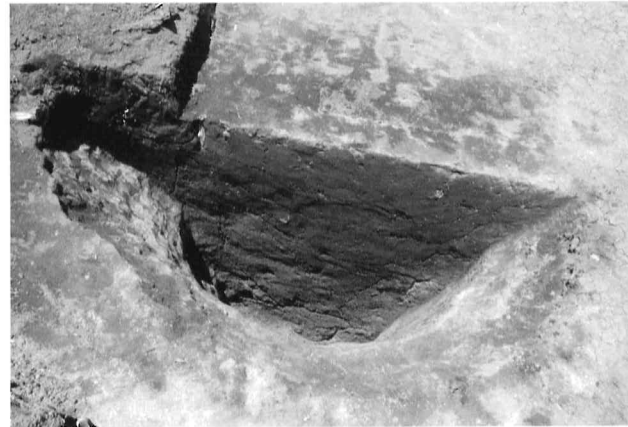
SB-02 完掘 (北から)



SB-03 完掘 (南から)



SE-01 完掘 (南から)



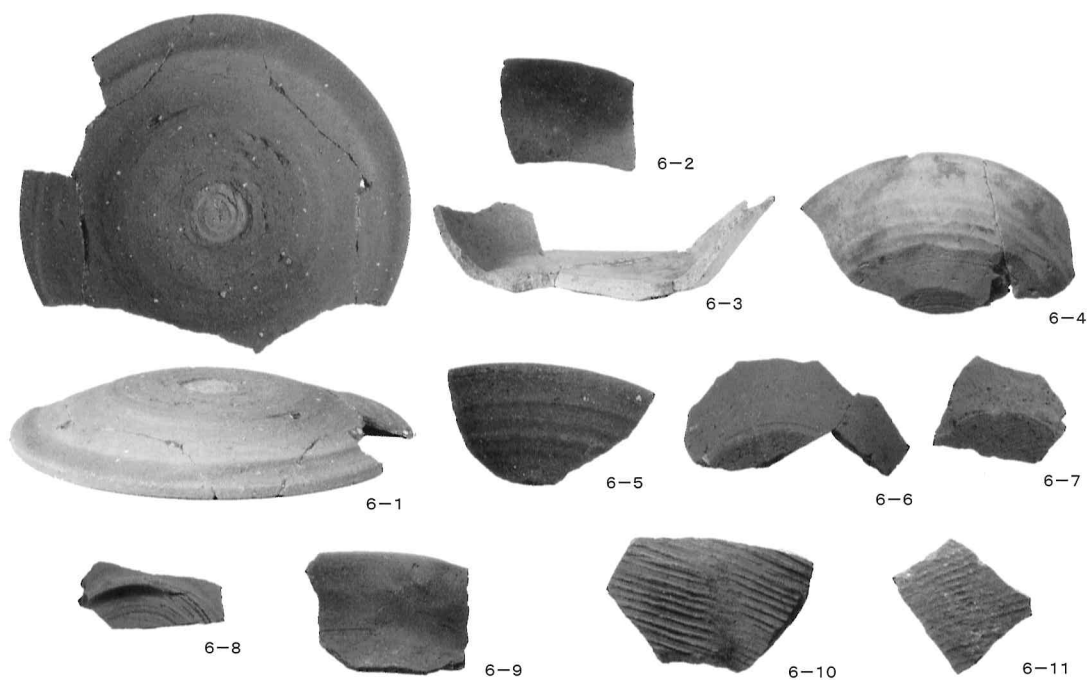
SE-01 土層断面 (東から)



基本土層 (東から)



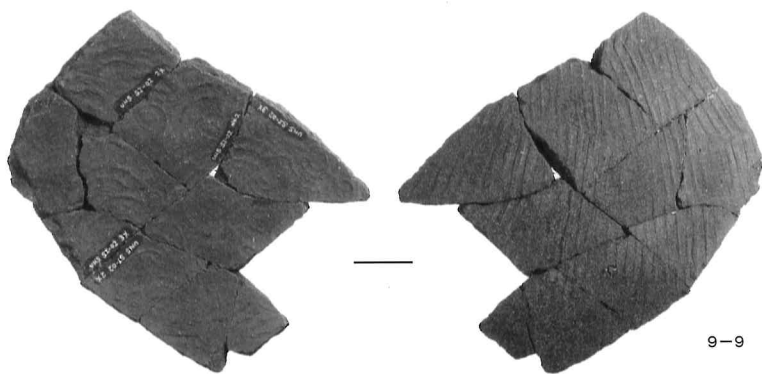
作業風景



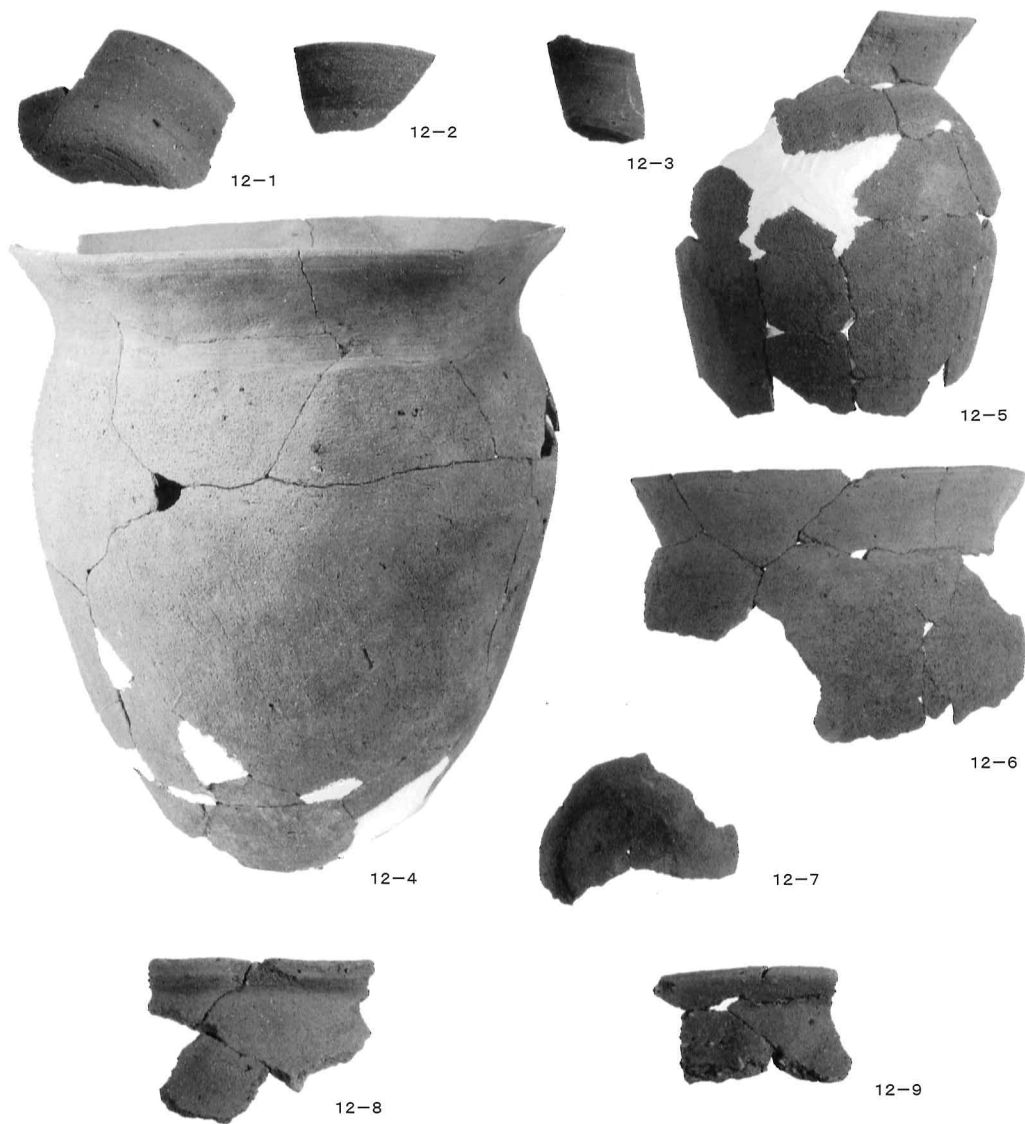
SI-01出土遺物



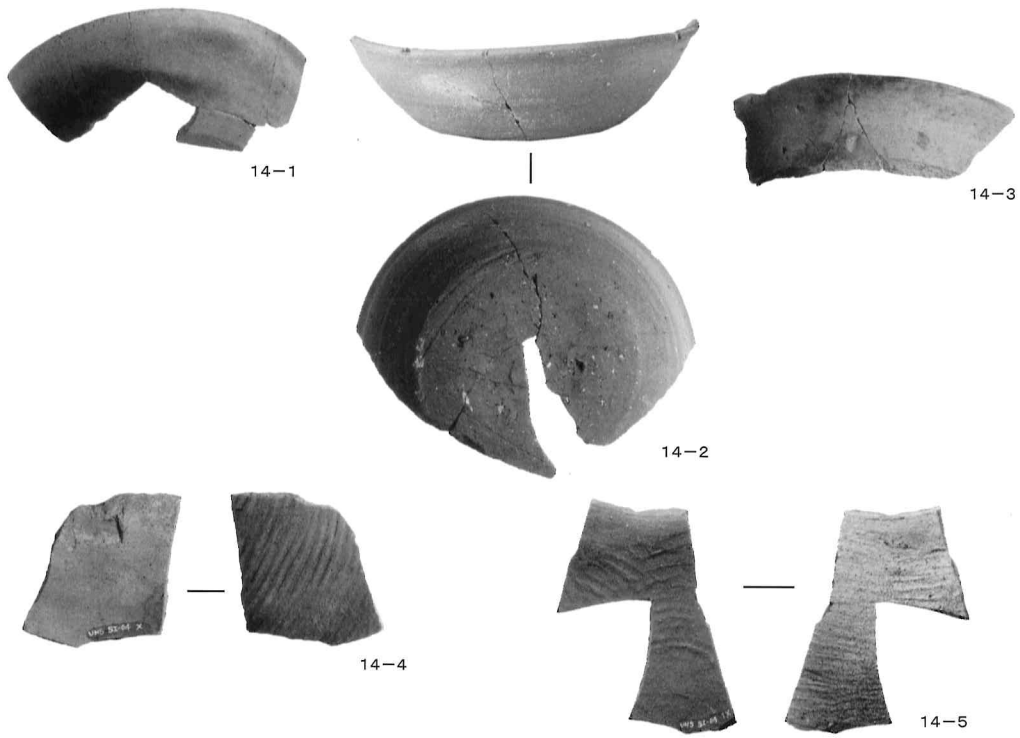
SI-02出土遺物



SI-02出土遺物



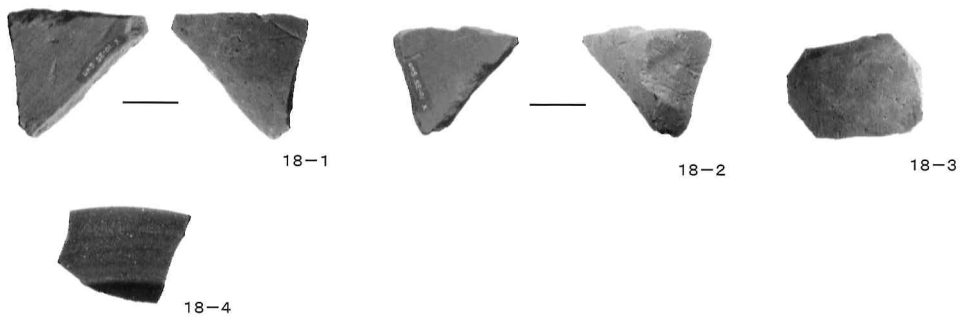
SI-03出土遺物



SI-04出土遺物



SB-02出土遺物



SE-01出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	さるやまいせき							
書名	猿山遺跡							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第103集							
編著者名	清地良太 三輪孝幸							
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5							
発行年月日	平成30年(2018)9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さるやまいせき 猿山遺跡	うつのみやしにしおさかべまち 宇都宮市西刑部町 2681-2	09201	358	36° 30′ 35″	139° 55′ 1″	20180618) 20180713	713.6 m ²	物流倉庫 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
猿山遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 4軒 掘立柱建物跡 3棟 ピット 10基 井戸跡 1基	土師器坏・甕 須恵器坏・甕				
要約	新4号国道に隣接する本遺跡は昭和49・50・53年に調査された猿山遺跡の西縁部に位置する。試掘調査の結果から集落の西縁が本調査区であることが確認され、また、今次調査区で確認した竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡は集落内での纏まりを持ったグループと判断できる。出土遺物量も少なく、ほとんどの遺構に埋め戻しの痕跡が認められるなど集落の終焉を推測させる遺構群である。							